
魔法少女リリカルなのは～哀れな転生者のセカンドライフ～

白鳥隆士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜哀れな転生者のセカンドライフ〜

【Nコード】

N3591K

【作者名】

白鳥隆士

【あらすじ】

神様のミスによって殺され、さらに勝手に転生だあ？しかもあの魔王のいる世界だ！？はあ・・・死なないようになんばろ・・・とか言いつつ大分関わってしまうお人よしのお話です。

ブログ（前書き）

どうも。以前からなのは2次創作を読んで自分も書いてみたい
なあ、と思って始めました。まだ全体の流れをすっかりつかんでな
いので不定期更新になる恐れがある上に駄文です・・・。
それでも読んでいただければ・・・と思う今日この頃です。
それでは、お楽しみください。

プロローグ

ん・・・？さつき寝たはずなのにもう朝か・・・？

『おはようマイスター』

ん？だれだ？

『それを説明するには今のマイスターの状態から説明せねばならぬあれ？そついや、体が妙に動かしづらいな・・・。』

『あゝ、まあちよつとこの映像を見てもらおうか』

お？頭ん中に知らないおじいさんが・・・。

『あゝテストス。聞こえとるか？まあ聞こえてなくとも話すのじゃが・・・』

なら無駄なことすんな。

『それでじゃな、いきなり赤ん坊になってびっくりしていることと思っ』
は？

『まあ、そうなつてしまった理由としてはぶつちやけワシがくしゃみしたらお前の頭にちようど隕石が落ちてしもつての。慌てて他の世界に魂だけ飛ばしたらそうなつてしまったのじゃ』
このくそ爺・・・

『その代わり？そこは『なのは』の世界じゃから、楽しんで生きてくれ』

いや、ちよつと待て。あの魔王のいるセカイだと・・・無理だろ・・・

・ o r z

『ま、そういうわけじゃ。それにそこにはデバイスが居るはずじゃ。そいつにはちよいとした秘密があるんでそれは本人？にきいとくれ。それじゃ頑張つて生きるんじゃぞ』

あ、おい！くそ・・・。

『わかったかの？』

まあ大体はな。

『ま、マイスターならば大丈夫じゃ』

何でそんなこと言えんの？

『今も拙と念話ができておるし、魔法の才能はあるはずじゃ』

あ、そうなの？これ念話だったんだ。

『まあ、とりあえずマイスターが成長するまで拙はマイスターの中で眠らせてもらう』

今からできることなんてないからな。赤ん坊だし・・・。

『そういうことじゃ。まあ、マイスターが一人で行動できるようになったときまた会おうぞ』

ん、わかった。それじゃ、これからよろしく・・・え〜と

『ん？どうしたんじゃ？』

名前決めてないけど・・・？

『そんなものは拙を使えるようになってからでよかるう。それではの、マイスター』

あ、うん。

はあ……、これからどうすりゃいいんだ？

1話 いきなり時間が飛びますが・・・（前書き）

連投2～

1話 いきなり時間が飛びますが・・・

さて、皆さんこんにちは。なんの前触れも予告もなく転生させられた人間です。

あれから5年。ようやく一人での行動が可能になったので、そろそろあの爺がくれたデバイスを手に入れようと思う。

ので、まだ日も昇らぬ時間に近くにある海鳴臨海公園へと向かう。

「あれ？でもどうやって出るんだ？」

やばい、あのデバイス何も説明してねえから何もわから

『おお、ようやくか。すこし遅いのではないか？マイスター』

・・・どうやら杞憂に終わったようだ。

「悪いな。家庭的事情からだ」

少し・・・とは言い難いくらい過保護な両親が一人での外出を許してくれないという悲しい状況が起きている・・・はあ。

『そうか。まあよい。それでは拙は目覚めるとしよう』

そう言うと同時に胸から小さな真紅の光球が出てきて、それを支点として鋏となった。

形状としては、裁ち鋏で持ち手の右に指を引っ掛ける穴があり、左側は穴がないという感じた。

かっこいいと思うが・・・何故鋏？

『まあ、マイスターがそのような顔をするのもわかる。しかし、こ

れにはきちんとした理由があるのじゃよ』

「どういうこと?」

『簡潔に言えば、マイスターのレアスキル——テーラー仕立屋というんじやが、このレアスキルを使うために拙は鋏の形をとっておる』

やったね、生存率が少しは上がる!!

「で、そのレアスキルってどんなの?」

『うむ、マイスターが鋏に魔力を込めつつ、きちんとその用途に合った服飾関係の物を作ればその能力を使うことができるようになるのじゃ。例えば防護服を自分の想像した硬さ・・・銃弾を防げるとかの・・・に変えることができるのじゃ』

「大分チートな能力だな・・・」

『ここだけ聞けばの・・・。まず、この能力は30分しか持たぬ。次に、マイスターが服飾関係の能力をきちんと持たんと服を作れぬ更に、その想像した力が強いほど魔力は消費する。これらの点に気をつけて使わねばならぬ』

「うーん・・・、とりあえず今の俺に出来ることは裁縫を基礎から学ぶところからか」

『それに加えて魔法も練習せねばならぬな』

「あゝ・・・、そつか。まあそれは毎朝ここにきて結界を・・・張れるよな?」

『大丈夫じゃ』

「ん、なら問題はない。よし、せっかくだし今からやろっぜ」

『そうじゃの。それでは拙の名を決めてはもらえぬか?』

「そうだな・・・フーフ、なんてのはどうだ?」

『うむ、気に入ったぞ。それではマイスターの名を』

「俺の名は・・・シヨウゴだ」

キャラ&デバイス紹介〜ネタバレ注意〜（前書き）

連投3で打ち止めです

徐々に追加していきます

キャラ&デバイス紹介〜ネタバレ注意〜

主人公&デバイス紹介

主人公：狩野翔吾かりのしょうご

年齢：無印開始時点で15歳（数え年で16）

身長：165cm

体重：55kg

容姿：目と髪は黒色で髪は腰あたりまで伸ばしてある。肩甲骨あたりで縛ってある。前髪がいつも垂れ下がっており、顔はよく見えな
い。前髪をあげるか切れば普通にかっこいいのだが、本人は散髪が嫌いで、さらに身だしなみに関してはかなり適当であるため（服関係は別）いつも変わらない。

体形は細身だが、筋肉はきちんとついている。

特技：裁縫、家事全般

趣味：裁縫、料理

魔導師ランクB+

魔力光 蒼色（レギオスの剋の色）

神によって勝手に殺され、勝手に転生させられた人間。なのは自体は一応、一通り見て知っている。本人は原作イベントに巻き込まれ

ても死なないように毎朝きちんと鍛錬をしている。
ぐうたらな面もあるのだが、自分の信念は曲げない。嘘をついたほうがつまぐ進む場面で無駄に正直に振舞ってしまうこともしばしば。
。。。

レアスキル：仕立屋^{テーラー}

魔力を込め、想像した強さになる服飾を作る能力。しかし、服の出来が悪かったり、バカみたいな想像をしたりすると前者はまともに使えず、後者は魔力がすっからかんでデッドor気絶になる。

30分しか持たない。

その後は1週間ほどその服は使えなくなる。また、1度限りの消耗品としても使うことが可能。

持続的な効果をもたらすものも作れるが、使用者の魔力を常時使用。負担度は効果によって変わる。

デバイス：ファイフ

独特の言葉遣いをするデバイス。ショウゴのことをマイスターと呼ぶ。あと、ちょっとした秘密がある。

待機形態は鋏。

ノーマルモードは鋏をそのまま大きくしたもの。

1st ^{ガンソード} 銃剣フォーム

外見はFF?のガンブレードかクロスボーンガンダムX3の主装備を思い浮かべてもらえるとわかりやすいと思う。一応、近距離から遠距離までこなせる汎用性の高いフォーム。

2nd ダブルソード 双剣フォーム

日本刀くらいの大きさの缺の片刃を右手に、小太刀位の逆側の缺を左手に分かれて持ったフォーム。近距離が主で一応中距離からも攻撃可。

3rd ダブルガン 双銃フォーム

待機状態の缺をそのまま両手に持ち、ちょっと銃らしく変形したフォーム。主は中距離からの弾幕、収束砲としてウイングガンダムゼ口のツインバスターライフルみたいなのが撃てる。

キャラ&デバイス紹介〜ネタバレ注意〜（後書き）

3 / 17 ユニコーン様ご指摘ありがとうございました。

5 / 26 デバイス関連、レアスキル関係変更

2011 3 / 24 魔力光を追記

2話 原作メンバーとの初エンカウント（前書き）

かなり放置してすみません……。これから更新速度をあげて行きたいと思います。

2話 原作メンバーとの初エンカウント

ファイフと再会して7年。ここまで特に原作に関わるようなことはほとんどなかった。どうやら同世代に主人公らはいないようでほっとしている。

まあ、デバイス持たすくらいだから絶対にジュエルシードやら闇の書やらの事件が発生するんだろうけど。

だが、今のところそういうことは起きてないのもうちよっとしてから翠屋に訪れてみようと思う。

今までは母に頼んで買ってきてもらってたからな。ちなみに味はすごく良かったとだけ言っておこう。

さて、現在俺は年齢的には中学一年生ということになる。その為、今も通うことになっているのだが・・・、正直暇なんだ・・・。

前世の記憶やらなんやらは結構危ういので面白みを持たし、見られても俺の書いてる小説か何かと思えるように旅行記風に書き記しているのだが、知識関係のことに關しては以外にも劣化が少なく高校卒業程度の知識は持っている。

イコール、授業内容がわかってるため面白くない。

元来、面白いと思うものに関してのみ半端ない集中力と記憶力を発揮する俺としてはこの状況は戴けない。

ので、授業中は専ら裁縫の練習をしている。

といっても、5歳からやり始めている為本当に専門知識と技術が必

要なもの以外は大体作れるようになっていたため、レアスキルの活用法の研究に勤しんでいる。

おかげで無印時点のなのは相手に俺の魔力でも互角にやりあえるほどだ。

まあ、その分の反動は酷いものだが……。

そんな感じで毎日を過ごしていたんだが……、

「今日に限って布と糸を補充し忘れるとは……」
せっかく創作意欲が湧いていたのに……orz。しょうがない、次の時間はサボって買い出しに行こう。後でなんか言われるだろうが……いつか。

というわけで持っているメモ帳の1ページを破り、伝言を書いて教室の上に置いて教室を出る。

ちなみに内容は、

『親愛なる担任へ
家出します、探さないでください。多分、きっと、maybe、次の時間中に帰ってきます。でも確定ではありませんので。その辺はご勘弁をば。では。』

仕立屋狩野』

である。

さて、そんなこんなで授業の半分くらいの時間までに買い出しを終え、学校へ向かってまったりフィフと雑談しながら歩いていたのだが、

『シヨウゴ、この公園の中に誰か居るみたいじゃぞ？これは泣き声のようじゃが・・・』

とフィフが言う。耳を澄ませば・・・確かに泣き声が聞こえる。声の感じからして子供か？

しかし、おかしいな。こんなところで一人子供が泣いているとは・・・親御さんはどうしたんだろう？

『どうするのじゃ？』

うゝむ・・・このまま放置するのも気分が悪いし・・・。

「とりあえず中に入ってみるか」
ということでは L e t ' s g o !

泣き声を頼りに進んでいくと、ベンチに座っている茶髪にツインテールの少女（幼女？）がいた。
あれっでもしかしくなくても高町さんちのなのはさん・・・だよな？まさかこんな所でエンカウントするとは・・・。

しかし、何故彼女がこんなところに一人で？こんな場面アニメでは

なかったよな？

『どうするのじゃ？いつも原作には介入しないとか言っておったが・・・』

それなんだよな・・・正直ここで関わるときつと原作に巻き込まれるだろう。きつと。

まあ、この街に住んでるだけでも可能性大なのだが・・・
うゝむ・・・。

・・・しょうがないか。ここで見かけたのも何かの縁。それに泣いてるやつを見なかったふりでスルーするのも気分が悪いし。

『うむゝそれでこそ我がマイスターなのじゃ』
・・・うるさいわ。まあいい。決めたら即実行。ということでベンチにいらっしやる高町なのは嬢の元へ向かう。

目の前まで来たのだが、まったく気付いた様子がない。そんなに深刻な問題でもあったのか？

彼女を怖がらせないため、同じ目線になるようにしゃがみ込む。ここでようやく、俺の存在に気づいたらしく、こちらに目を向ける。

「おにいちゃん、だれ？」

泣きはらした目が真っ赤で痛々しい・・・。まったく・・・あのシスコン（と呼ばれている兄）&親バカ（らしい父親）はどうしたんだ？こんなになってんのに気付かない訳がないはずなのに・・・。

とりあえず、それは置いておこう。今は目の前にいるこの子のほうが大事だ。

「俺は狩野翔吾、気軽にシヨウゴとでも呼んでくれ。君は？」
まずは自己紹介。怖がらせないよう、軽めに優しい語調で言う。

「なのは、高町なのはなの。みんなはなのはって呼ぶの」
なんか文字にあらわすと大変見ずらそうだな・・・。

「そうか。じゃあ俺もなのはって呼んでいいか？」
そう言うところ、と頷く。なんともかわいらしい仕草に頬が緩む。
言っておくが俺はロリコンではないぞ！ないからな！！大事なことから二度言いました。

「なのははなんでこんなところで一人泣いてるんだ？よかったら話してもらえるか？つらかったら無理にとは言わんが・・・」
ぶっちゃけ今どんな状況にあるのかがわからんとどうしようもないのが現状だ。とりあえず情報を集めんと・・・。

「なのはのおとうさんがおケガして、おかあさんがお店でいそがしくて、おねえちゃんがおとうさんのところにいて、おにいちゃんがこわくて・・・なのははじゃまをしないように一人でいるの。でもさびしくないの。へいきなの」
えーっと・・・ちよつとまとめてみよう。

まず、士朗さんはケガをしている。とらハはやったことないから詳しくは知らんが確かそんなイベントがあったとアニメでも話してたな。

で、家族全員がそれぞれ忙しくしている・・・と。こんな感じかな？
一人でも平気とか言ってるが、それは嘘に決まってる。誰にでもわかる嘘だ。でも誰も気づいてやらない・・・。気づいてやれないだ

けかもしれないが、これは酷い……。

とか言っても、今の高町家全部をどうにかできないのが現状。俺一人の力なんぞでどうにかなる問題ではない。

しかし、この少女一人を救うことだけならできるかもしれない。たとえ救えなくとも少しでも悲しみを軽くしてやれるかもしれない。

今持っているこの魔法はこ^ちからいうことに使うべき……と俺は思う。

よし、目標はなのはを笑わせること！これで行こう。

「なのは、これから面白いものを見せてやる」

そう言いながらこれからやることの手順を一つずつ確認していく。

「おもしろいこと？」

「ああそうだ。まずは……この布、なんの種も仕掛けもございません」

持っていた袋から布をとりだす。先ほど買った白い布である。それをなのはの前で裏表を見せた後、手に取らせて何の変哲もない布であることを確認させる。

「で、これに……」

ほんとはきちんと採寸してきちんと製図してからやりたかったのだが、それらはすっ飛ばしフィフに魔力を込めつつ頭のイメージを植え付けるようにパーツに切り分けていく。

そして、それらを特製の糸で頭の設計図と同じになるようにくっつけていき……

「よし！完成！」

手の中にあるのは一つの帽子。白い生地で頭の部分に猫耳がついている。わかりやすく言えばFFの白魔道士のフード部分だ。

「さ、なのは。これをかぶって」

そう言いながらなのはに差し出す。少し戸惑っていたが、言われた通りにかぶる。

「これから30分間のショータイム！」

指パッチンをする。それと同時にたくさんの動物が現れる。鳥、猫、犬、タヌキ、熊etc・・・。

それと同時になのはは驚いた顔をする。

「シヨ、シヨウゴおにいちちゃん・・・なのは、この子たちが言っていることがわかる・・・」

「言ったる？面白いことをするって。今ならお前の言葉も伝わるから話してみな」

そう言いながら俺は肩にとまっている一羽の鷹を撫でる。こいつとは何となくだがあの帽子を使わなくとも意思疎通が取れる。こいつが特別なのか、それとも一番初めからの付き合いだからなのかはわからないが。

さて、今更だがあの帽子に関しての説明をしよう。

あの帽子はワイルドキャップ。簡単に言えば多種多様の動物と意思疎通が取れるようになる。こちらの言葉はあっちに伝わるし、逆もまたしかりだ。

始めは面白半分に作ったのだが、動物とコミュニケーションをとるのはなかなか面白い。今でもたまに使っている代物の一つだ。

まあ、これに関してはこんなもんだ。

なのはの方は、指に小鳥をとめて話をしている。同時に周りにはたくさんの動物が。

彼らと話しているうちになのはに自然な笑顔が浮かんでくる。うむ、やっぱり女の子には笑顔が一番だな。

だからと言って俺はロリ（ry

そうこうしているうちに30分がたち、レアスキルのタイムリミットが訪れる。

それを確認した後、俺は軽く手を2度打ちならす。そうすると動物たちは来たところに帰っていく。俺の肩にいる鷹以外が、だが。

その動物たちになのはは元氣よく手を振る。もう顔には暗い影は見えない。年相応の笑顔を浮かべている。

そんな笑顔に嬉しくなりつつ、彼らが見えなくなったのを確認してから話しかける。

「楽しかったか？」

「うん！とってもたのしかった！ありがとう、シヨウゴおにいちやん！」

満面の笑顔を見せる。うむ、目標達成！やったね！

「よし、なら今度は俺と遊ぼうぜ」

そう言つて俺は手を差し出す。それを見、俺の顔を見、再び手を見、もっかい俺の顔を見て、

「うん！」

笑顔とともに元気よく返事をして俺の手を握る。さうで、暗いことを吹っ飛ばす位遊びつくすぜ！！

2話 原作メンバーとの初エンカウント（後書き）

文章でおかしいところや誤字脱字がございましたらすみません。

3話 8時だよ！高町家集合！（前書き）

すみません・・・何故か筆が進まん・・・。ある程度先のプロットならできてるのに。やはり過去から始めたのは無理があつたか！
と思いつつ四苦八苦しながら書いています。とりあえず、1週間を基本としてこれからは更新しますのでよろしく願います。

特にサブタイは意味なし。

3話 8時だよ！高町家集合！

なのはと知り合い早数ヶ月。色々あったがまあ平凡な日常であったため割愛させてもらう。

さて、この数ヶ月間なのはと接してきたがいまだにいい子であろうとする姿勢はやめる気はないらしい。今のところ俺に対しては例外になっているようだが、他の人に対しては相変わらず。

まあ、こんな回想で始めたのも色々理由があつてのことだ。とりあえず今の状況を説明したいと思う。

現在位置・・・高町家の居間

隣にはニコニコ笑っている士朗さん、なのは。士朗さんの隣にはこれまたニコニコした顔でいらっしゃる高町桃子さん。前には殺気立ちまくってる高町恭也さん。その隣に面白そうなものをみるような目で見てくる高町美由紀さん。

ちなみに士朗さんとはすでに面識ありだ。見舞いに行つて話したら面白い人で意気投合し今に至る。

で、この状況になつたいきさつを簡単にダイジェストしてみる。

俺、なのはと遊ぶ約束をしたため公園へ。

←

何故かそこには高町家が！！

←

士朗さんと高町恭也さんにつかまる。

←
拉致られ現在へと至る。

まあだいたいこんな感じ。とりあえず目の前にだされたお茶を飲む。
あゝ落ち着くわ……。

「さて、シヨウゴ。まずはお礼を言わせてもらつよ。なのは面倒
を見てくれてありがとう」

「いや、俺も楽しかったしいですよ。まあ落ち着いてきたみたい
ですしこれからはちゃんと構ってやってくださいね？」

「ああ、わかつてるよ」

俺の言葉に頷く士朗さん。さて……

「じゃあ、これで用事は終わりですか？」

この殺意が向けられる場所からはさつさと立ち去りたい！

「いや、実はもう一つあってね。ちょっとついてきてくれないかい
？」

そう言つて立ち上がるので、俺も立ち上がる。高町恭也さんと美由
紀さんもくるようだ。

で、ついて行つた先は道場。個人の家でこれはないと思うんだ。

「さて、もう一つの要件だが俺のリハビリに付き合ってくれないか
？」

いや、そんな壁から小太刀を2本選び出しながら言わないでほしい。

「なんで俺何すか？そこにいらつしやるご子息でもよろしいでしょうに」

そう言つて殺気立つてる高町恭也さん＆美由紀さんの二人を指差す。

「まあそうなんだが、君も何かやっているだろう？我流だと思うがあれ？なんでそんなことがわかるの？」

「基本に忠実。きちんと重心をずらさずに歩いてたりしてたけどどこか違和感がある気がしたからね」
へへ・・・自分では気づかなかったな。

「そういうわけでやるとしようか。どんな得物を使う？」

「俺に拒否権はないんすね・・・じゃあ・・・それとそれで」

俺が選び取つたのは長さ2尺ちよいの太刀と、1尺程度の小脇差だ。それらを右手に太刀を、左手に小脇差を逆手に持つ。感じていえば某子供たちの運命2の仮面坊ちゃん的な感じである。

「それじゃあ」

「はあ・・・」

「「いざ参る！」」

といった瞬間に士朗さんが距離を詰めてきて抜刀。めっさ速い斬撃が飛んでくる。それをぎりぎりで防いで衝撃で後退するが、そのま士朗さんはいついてきて更にめつた切りのしてくる。

ぶっちゃけそんな防げるか——！！って感じなんで急所コースのみ防ぎ、受け流す。他の部分が痛いけどな！！

しかし・・・このままでは何もせずに終わるな。それは・・・なん
というか悔しい。と言うことで無詠唱でソニックムーヴを待機詠唱。

士朗さんの激しい攻撃の中でタイミングを計る。まってまってまっ
てまってまってまって・・・今！！

何となくカチリと何かがハマった音と同時に太刀を大ぶりに振って
はじいた後、ソニックムーヴ発動！

士朗さんの背後をとり、小脇差を振るう。とった！

と、思った瞬間に士朗さんがかき消えて頭部に強い衝撃を受けた後、
視界がブラックアウトした・・・。

4話 一気に飛んで無印突入！・・・これ結構無理な展開じゃね？（前書き）

すみません・・・まったく話が思いつかないんで一気に飛ばさせてもらいました。

4話 一気に飛んで無印突入！・・・これ結構無理な展開じゃね？

目を開ける。そこには見知った天井。

「なんとも懐かしい夢を見たもんだ」

起きつつ今まで見ていた夢の内容を思い出す。まさか死ぬ前でもないのに今までの記憶をたどることになるとは・・・。

まさか死亡フラグでも立ってんのか・・・？

まあ、そんなバカなことを思いつつ日課となっているトレーニングに出るため準備を始めた。

いつも通り魔法のトレーニングの後、高町家のトレーニングに混ぜてもらって帰宅。そして学校へ行く準備へと入る。

さて、ここまで説明もなしで進めてしまっただけ。今、俺は高校1年生に上がり、なのは達は小学3年へと上がった。

つまり、原作へは秒読み・・・と言いたいが、朝のトレーニングの途中オープン回線での念話が来た。

ぶっちゃけトレーニング中にされていらつぎ、すぐに打ち切ったりしたんだが・・・。

そんなことは置いといて、今日から無印編スタート、と言うわけだ。

はてさて・・・俺は動くべきか動かぬべきか・・・。

あっ！と言う間に夜になり、現在フェレットもどきのいる（らしい）動物病院から離れた場所に待機。

らしい、というのは夕方になのは達からメールがあつて場所も書いてあつたためである。

まあ、私用があつたから行けなかったが。

ちなみに、俺は別に積極的に介入する気は毛頭ない。しかし、ジュエルシードによって被害がどれくらい出るのかわからんし、なのはケガとかするのはできるだけ防ぎたいと思つたりしてはいる。

ので今回は相手の強さを確認して、その結果から今後の行動を決めていこうと思う。

おっと、そんなことを考えてる間になのはがフェレットからレイジングハートを受け取っていた。

・・・戦闘の音とかしてたはずなのに気付かないとは。

まあいいや。さて、アイツはどう動くっ！？

nanoha side?

何となく嫌な感じがして思わずここまで来ちゃったけど・・・

「な、何々!? 一体、何!?!」

変な黒いものに襲われちゃってます!

「来て! くれたの?」

「喋った!?!」

フェレットが喋るなんてもうわけがわからないよー!

「う、その、何が何だかよく分かんないんだけど、一体、何なの? 何が起きてるの?」

「君には資質がある。お願い、僕に少しだけ力を貸して!」

「資質?」

「僕はある探し物のためにここではない世界から来ました。でも、僕一人の力では思いは遂げられないかもしれない。

だから、迷惑だとわかってはいるんですが、資質を持った人に協力して欲しくて。

お礼はします。必ずします。僕の持っている力を、あなたに使って欲しいんです!

僕の力を。魔法の力を!」

「魔法?」

「お礼は必ずしますから！」

「お礼とかそんな場合じゃないでしょ！どうすればいいの？」

「これを！」

そういつてフェレットさんは首につけていた宝石を私に手渡す。

「暖かい……」

受け取ってから、思わず呟く。

「それを手に目を閉じて、心を澄ませて！僕の言う通りに繰り返して！いい？いくよ！」

「うん」

「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

「契約の下、その力を解き放て！」

「えっと、契約の下、その力を解き放て！」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして、不屈の心は」

「そして、不屈の心は・・・!?」

言われた通りに言葉を紡いでいると、あの黒い変なのが来ていたの！それで思わず目を強く閉じ、小さくうずくまったんだけど・・・いつまでたっても痛みがない？

おそろおそろ目を開けると、そこには赤い服を着て、大きな鋏を持った男の人がいた。

s i d e o u t

おいおい・・・、こいつ何で空気を読まずに攻撃を加えようとしてるんだ？思わず飛び出しちまったじゃねーか。

ちなみになのはにばれることはない。首には黒いマフラーを巻いて口元を隠し、バンダナで前髪を上げ、仕立屋効果で髪色を金色にして、グラサンをかけている。

ちなみにこのグラサンは暗視ゴーグルとしても使える。動力は魔力。結構作るのに苦労した1品だ。

バリアジャケットだが、黒色のシャツに赤色の革つぽいジャケットを羽織り、赤色の革つぽいズボン、黒いブーツを履いている。

わかる人はだが、エレメンタルジェ○イドのクー○の格好を思い浮かべてくれるとわかると思う。

こんな感じで俺だとわかる要素はせいぜい髪の長さくらいなので大丈夫なのである。

まあそんなことは置いといて、

「何を呆けているんだ！さっさと起動しろ！」

黒い奴を鋏で抑えつけながら言う。俺の言葉で我に返ったのか、慌てて起動パスワードを言いなす。

2人に行った後、俺は黒い奴を弾き飛ばす。

「さて、ファイフ2ndフォーム」

『了解じゃ』

ファイフの言葉と共に鋏の形状が変化する。右手には日本刀のような片刃の鋏、右手には小脇差程度の鋏を逆手に持つ。

握りを確かめ、俺は黒い奴にツツコム。すると、奴は触手をたくさん飛ばしてくる。

それらをめった斬りにするが、斬ったところからドンドン再生していき一向に減る様子を見せない。

あれ？これってこんなに強かったの？

『どうするんじゃ？シヨウゴ』

むむ……しょうがないか。

そう思っ俺は右手の指に引っかかるように魔力の糸を作り、

「縛糸」

糸によって奴本体の動きを止め、体全体を使った回転斬りによって

すべての触手を薙ぎ払う。その後、縛糸の上からバインドをかける
と、

「リリカル、マジカル」

「封印すべきは、忌まわしき器、ジュエルシード!」

「ジュエルシード、封印!」

「sealing mode・set up」

「ヴオオオオオオ!」

「stand by ready」

「リリカルマジカル。ジュエルシード、シリアル21。封印!」

「sealing」

「ヴオオオオオオオ!」

そして残るのは青い宝石のみ。真っ黒だった景色も元に戻ってる。

「receipt number XXI」

なのははレイジングハートをジュエルシードに近づけ、回収。
コンプライト完了かな?
ミッション任務

それを見届けた後、俺は離脱を図ったが、

「それであなたは何者ですか?」

フレット＆なのはが立ちふさがる。ふうむ・・・どうするべきか・・・お？これ使えるか？

思ったら即実行。俺は親指を後ろに向ける。俺の行動に首をかしげて2人はみる。

その次の瞬間、何か音を鳴らしながら近づいてくる・・・そう、パトカーである。そのことに気づきなのはが真っ青になって走り去っていった。

まあ、俺も危ないしさっさと帰ることにしよう・・・。

5話 フェイト参上！邂逅の仕方はご都合主義・・・（前書き）

お久しぶりです・・・久々にこれ書きました。

今回、フェイトの性格が訳分かりません。そこに留意してお読みください。

5話 フェイト参上！邂逅の仕方はご都合主義・・・

初ジュエルシード会合の次の日の7時限目の始まる寸前、ちょうどチャイムがもうちょっとでなろうとするとき、

『シヨウゴ』

『わかつてるさ』

2つ目のが発動したみたいだ。たしか神社であつたか？
まあ、そんなわけでさっさと行こうとしたのだが・・・

「何処に行く気だ？狩野」

ちっ、まさか7時限目が生活指導ユウとは・・・。

こいつは数学教師の癖に異常な体力その他もろもろを持った面倒な先生だ。一度1時間つかまったら終わりのDeathマラソンをやらされたことがある。

気配を消して隠れても見つけてくるというふざけたスキルも持ち合わせている。

まあでも今回は本気で抜かねばならんだろう・・・つーわけで、

「便所つす！！」

速攻でまわれ右して走りだす。そんな嘘が通じるわけもなく、

「まで！！狩野ーーーー！！！！」

さーて、どうやって切り抜けるかね・・・。

結局、あの後ちようどこの時間の教室が3階だったので、廊下の窓から飛び降り、鋼糸をパイプに括りつけ落下速度を減少させてから降りて校門へダッシュ。曲がり角で認識障害魔法発動と同時にセツトアップし神社まで飛んで行った。飛んでる間にグラサンとマフラ―とバンダナを装備。ついたらばれない位置で俺の射程圏内の木の上に隠れる。

どうやらちようどなのはも到着したばっかのようだ。

相手さんも低く唸って威嚇中。あれって元々なから変化したんだっけ？多分犬か？

「ええー！！あんな長いの覚えてないよ！！」

ん？なのはは何でセツトアップしないんだ？セツトアップで言えばできるはずなんだが・・・ってまたセツトアップできてないのに犬？が！！

『スタンバイレディ、セツトアップ』

おゝ、今回は間にあっただか・・・よかった。

『バリアジャケット』

すかさずレイジングハートがバリアジャケットを展開し、なのはは事なきを得る。

が、犬？は一度鳥居の上に跳躍し、また襲いかかる。

『プロテクション』

なのはが無意識にプロテクションを張ってそれを防ぐ。それだけで犬？はノックアウトされ・・・って弱っ！？え？プロテクションにぶつかっただけで終わり！？

俺が驚いている間にどうやら封印も終わっただけ。よし、帰るか。
・・ゴリラには見つからんようにしないとな。

それから数日。なのははそれから何個かジュエルシードを集めたみたいだ。みたい、というのは俺が直接見に行ったのではなく、唯一あの帽子なしで意思疎通のできる鷹に頼んで他の鳥とも連携してこの町を見てもらっていた。

で、なんかついでに隣町まで狩りに行った時にマンションの屋上に変な二人組を見たらしい。

・・・あれ？もしかしてフェイト&アルフ？この時期に来てたっけ？
まあいいや。とりあえず今日はあっちの方をぶらぶら探索してみよう。

というわけで、やってきました隣町、遠見市。
とりあえず、金髪の長い髪が目印なのでそれを頼りに探そう。

（数時間後）

「フェイト、そっちの料理持ってきてくれるか？」

「うん、わかった」

「アルフは机を拭いてくれ」

「あんたの命令なんて誰が聞く」ならお前の飯はなしな」わかった
!!すぐ拭くよ!!」

さて、いきなりの超展開だが簡単に説明するところなる。

こっちに來たばっかのフェイトが食糧調達のため外出。

← スーパーを探すが見つからずどうしようかと悩む。

← そこに俺、参上

← スーパーへ案内及び買い物

← フェイトが買ったもの（冷食&ドッグフード）を俺が見る。

← それだけが飯と聞いて俺激怒

← フェイトの家に強制的に上がらせてもらっ

← 俺、飯作成及び完成↑今ここ

なんといつご都合主義・・・といたいだろうがまあ納得してくれ。

「さて、料理もできたことだし俺はお暇するかな」

とりあえずシチュー作つといたから何日か持つだろ。

「え？シヨウゴ帰るの？」

え？むしろまだいるという選択肢があることにお兄さんはびっくり
だよ・・・。

というかその目をウルウルさせるのだけはやめてくれ。俺がなんか悪いことしたみたいじゃないか……。

「もう少しだけいても……」

「あゝ……ならお前たちが俺の飯を食う間くらいはいるよ。感想も聞きたいし」

「うん！」

あるねえ？この娘こんな性格でしたっけ？1期だと追い詰められているとかそんなイメージがあっただが……。

「何してるのシヨウゴ？早くいこ！」

と言ってフェイトは俺の手を引っ張ってリビングの机まで行く。

「じゃあ……いただきます」

「はい召しあがれ」

二人は食べ始める。フェイトは少しずつ、アルフの方はがつつと。

「これ美味いねえ」

「うん。本当に美味しい」

どうやら二人の口に合っていたようだ。

すぐに二人は食べ終わった。

「ふう……美味しかった」

「そうだね」

「それは良かった」

二人の言葉に笑みを浮かべつつ俺は食べ終わった皿を洗う。

それから少し話した後、今度こそ俺はお暇することにした。

「それじゃあフェイト。鍋にシチューは作ってあるから気を付けて朝昼晩に火を入れて食べてくれ」

「うん。本当にありがとね」

「後これ一応渡しとく」

そう言っただ俺は一枚メモ用紙をちぎって渡す。

「これは？」

「俺の携帯の番号。何かあったら連絡してくれ」

「わかった」

「とりあえずはシチューがなくなったら電話くれ。飯作りに来るから」

「え！？そんな、悪いよ！！」

「いや、お前放っておいたら食生活が大変なことになりそうだ」

「・・・」

「まだ小さいんだしそういうのはちゃんとしておいた方がいいからな。ここは甘えておけ」

「・・・うん」

「それじゃあまたな」

そう言っ頭をポンポンと軽く叩く。

「うん、またね！」

「アルフにもよろしく言っといてくれ」

ちなみにあの狼は飯を食うとさっさと寝てしまった。

「うん」

「じゃ」

手を軽くあげてからエレベーターへと向かう。フェイトはエレベーターに乗るまでこっちを見ていた。

ちなみに補足だが、海鳴では少しの間大きな樹が突如現れたそうなの。
・・・忘れてた・・・orz

5話 フェイト参上！邂逅の仕方はご都合主義・・・（後書き）

あれだ、作者は今わからないことがいくつかあります。

その中で重要なのが、ジュエルシードの確保した数の経緯です。

詳しくわからないんでわかる人いたら教えてください！おねがいします・・・。

ちなみにわからなかった場合はその辺あやふやにして進んでいきますんでw

6話 とりあえず・・・今ジュエルシードとれだけ確保してんだろうか・・・

正直キャラの性格やらが変わっている気しませんが。

それでもどうか見捨てないでください。

サブタイは今の作者の気持ち。

6話 とりあえず・・・今ジュエルシードどれだけ確保してんだろうか・・・

次の休日。なのは達がお茶会をやるらしい。最近あの三人娘との付き合いが悪いので強制参加となった。

具体的にはアリサが俺を拉致ってすずかの家に現在進行形で向かっている。

「おいアリサ、この縄ほどけ」

そして何故か俺は今現在簀巻きにされている。

「いやよ。すずかの家に着くまではそのまま」

俺の上に乗りながらアリサは言う。

助けを求める感じに運転席の鮫島さんに視線を送るが、なんか「すみません」的な感じで軽く会釈された。

ここに俺の味方はいないのか・・・。

で、すずかの家について簀巻き状態から脱出！したのだが・・・

「なんで俺の扱いが犯罪者みたいなんだ？」

今度は手錠をかけられ、それについた紐で庭に連行される。ちなみに持つてるのは三人娘全員。

「なんとなく離したら逃げ出しそうだから」

アリサの容赦ない一言。というかそこ二人、縦に首を振るな。

「今日はそんなことしないさ」

フェイトには昨日飯を作ったばかりだから行く予定はないし、友人たちは皆部活動で忙しいだろうし。

「まあそんなこと言っても外すのは庭についてからだけど」
アリサは歩きながらそう言った。ちくせう……。

手についた手錠はなくなり晴れて自由の身になった後、お茶会に来ているが、茶を飲まずにずっと猫と戯れていた。

「それにしても、シヨウゴを見てると私たちが仲良くなったきつかけを思い出すわね」

上品にティーカップの中身を啜りつつ、アリサは言う。

「そうだね。あの時シヨウゴさんが来たのにはびっくりしたけど」
茶菓子に手を伸ばしつつすすずかが続く。

「そうだよね。あそこでシヨウゴお兄ちゃんが来たのはびっくりしたよ」

なのはは笑いながら話す。

そう、この三人が言っているようにあの友情イベントに俺は介入することとなった。

まあ簡単に説明すれば、

体育でマラソンだったので走っていて、聖祥小学校の近くを通りかかりなんか泣いてる声とかはたいいてる音とか聞こえたから忍び込み向かって見ると……といった感じだ。

その後警備員に一時間ほど追い回されたのもまあいい思い出だ。

そんな感じで談笑しているとジュエルシールドが発動したらしい。

なのは達もそれを感じ取り森の中へと向かう。んゝゝゝ俺も行くべきかねえ。

「じゃあアリサ、すずか。俺もなのはとこ行ってくる」

「え？何でよ」

「お前なあゝゝあのなのはだぞ？何処でアホみたいなことをやらかすかわからないだろうに」

例えば木の根に足を引っ掛けて転んだり、何も無いところで転んだりゝゝゝ色々前科があるのだ。なんであんなに運動神経が悪いんだろうな。

俺の言葉に唸る二人。前科がある分否定できないようだ。

「ま、そういうわけで。すぐなのはを連れて帰ってくるさ」

二人の頭を軽く叩いて森の中へと向かう。そう言えばフェイトはバリアジャケットの俺を知らなかったなゝゝゝ。

下手に後々出ていくような事態になった時厄介だし今回姿を見せておくか。

そう思ってフィフを起動。いつもの装備をして準備万端！よし行くう！

と意気込んで向かうとすでにクライマックス。というかなのはが絶賛落下中。

「フイフ、ソニックムーヴ！」

『了解』

とりあえず跳んでなのはをキャッチ。落下地点にいたフェレットに任す。何か言ってきたが華麗にスルー。

確かフェイトは雷の魔力変換資質持ちだから猫が可哀そうなことになるそうだ。

というわけで介入。シーリングモードになっているバルディッシュをこちらに向けてくる。敵意もビビシとんでくる。

「すまない、君と争う気はないんだ」

今回フイフは出していないので何も持っていない両手を上げ、敵意がないことを示す。が、まあ現実はそのような簡単なことではないので状況は変わらず。

「あなたは・・・あの子の仲間ですか？」

「いや、彼女とは無関係だ」

この姿なら、だが。

「わたしはこの町に移り住んでいてな。急に現れたロストログア・・・ジュエルシードといったか？これが危険物なのでできる限り早めに処理したい。だから君だろうが彼女だろうがどちらでもいいからさっさと片付けてほしい。今日はそれを伝えに來ただけだ」

俺に敵対されないことがベスト。できればどちらの味方でもなく、どちらの味方にもなれる中立の立場でいたい。

じいっとこつちを睨むフェイト。その視線からそらさず見つめる、すると、あちらも納得したのかバルディッシュを下ろす。

「今回はあの猫が苦しい思いをするのを止めたくてな。代わりに私が封印させてもらってもいいだろうか？」

「すこしでも変な真似をしたら・・・」

「ああ。別に遠慮せず攻撃するといい」
それで一応フェイトはすぐに攻撃できるよう構える。それを見て、

「よし、ファイブ起動。及び1stフォーム」

『あれを使うの？』

「まあ、代用できるのあれしかないし」
そう言いつつ手に握る両刃の鋏のような剣。

「いくぞ・・・斬魔閃！」
振りかぶって一閃。魔力の斬撃が飛び、猫をすり抜けてジュエルシードのみが飛び出してくる。
それを魔力の糸で確保。

「ほら、受け取れ」
で、それをフェイトに投げ渡す。あわててフェイトはそれをキャッチする。

「それではな」
とりあえず今回の目的は達成。さっさとなのはを屋敷に連れて行かんな。

「待って下さい！」

ん？フェイトに呼びとめられたため首だけ振り向く。

「何か？」

「あの・・・名前は？」

あれ・・・？本格的に違う性格な気しかないぜ。

「私は・・・クードだ」

咄嗟に浮かんだのはこのバリジャケットの元となった服を着てる人の名前。しょうがないのでこの偽名でおすことに。

「君は？」

知っているがこの姿でも聞いておく。

「フェイトです。フェイト・テストロッサ」

「そうか。君によく似合った名前だ」

なんか気障なセリフだな・・・これ。まあいいや。

「ではフェイト。また機会があれば会おう」

「はい」

今度こそ俺は去る。フェイトの方も飛んでったようだ。さて、バリジャケットを解除してなのはを迎えに行こうかね。

その後、元の姿に戻ってからなのはの元に向かい、背負って月村邸に帰った。色々と聞かれたり襲われかけたりしたが、俺の根気強い

説明とかその他もろもろでどうにか終結。

なのは夕方頃に起きて皆から心配されていた。その顔はどこか思いつめた感じで・・・はあ。

まあ、俺に出来ることは慰め、励ますことだけ。心が痛むがなのは自分が解決するしかない。

とりあえず、できる限りなのは達が傷つかないように何かに願っておいた。

7話 海鳴温泉（前書き）

もっと更新早くしないとなあ……。そんなことを思う今日この頃。
ほんと始めっから同じこと言ってるけどさ。

あと、今回めっちゃ描写が吹き飛んでたりしますが、まあ気にしないでください……。

7話 海鳴温泉

連休初日の朝、今日は用事も何もなかったはず……はずなので情
眠をむさぼっていたと思っていたんだが……

「あ、やっと起きたの。シヨウゴお兄ちゃんお寝ばさんなの」
あれ？目の前になのはの顔？

「でもこいつ今の状況わかってるのかしら？」
アリサも？

「おはようございます、シヨウゴさん」
すずかも？

うゝむ……夢にこの三人娘が出るとは……俺の深層心理に小一
時間ほど問い詰めたいが、

「寝よ……」
二度寝を……

「」「寝るな!!」「」

「おうふっ!」
鳩尾にパンチを入れんなよ……。

「目が覚めた？シヨウゴお兄ちゃん」

「さっさと起きなさいよ」

「寝ちゃダメですよ、シヨウゴさん」

くそ・・・何事もなかったかのようにふるまうとは・・・。

「で、何の用だ？人の部屋にまで無断で侵入しやがって」

せつかく休みの日だから情眠をむさぼろうとしていたのに・・・。

「あら、聞いてなかったの？あんたのお母さんには言ってたはずなんだけど」

なぬ？どういうこと「あ、シヨウゴをびっくりさせるために言っ
てなかったのよ・・・おい。」

「それじゃなのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん。その子を
頼んだわね」

「・・・あ、はい！」「」

なのは達の返事を聞いた母さんは笑いながら俺に質問をさせる暇も
なく部屋から出て行った。

「で、どういうことだ？」

しょうがないのでこいつらに事情を聞くことに。

「うん、シヨウゴお兄ちゃんと私たちの家族で温泉に行くの！」

たしかフェイトと二回目の対戦だったか？

「まあ行ってもいいんだが準備が「もうできてるわよ」・・・さい
ですか」

母さん・・・まあ知ってたんなら準備してもおかしくはないけど・
・・・。

『うだうだ言っておらんでさっさと行くべきじゃろっ』

ま、そうだな。

「よし、じゃあ行くか」

あれから翠屋で士朗さん達と合流。車に乗り込んで旅館へ。道中はしりとりやらランプやらをやって暇をつぶしたり、なのはをいじったり、アリサをいじったり、すずかのほんわかった空気に癒されたり色々あったがその辺は割愛。

べ、別に書くのが面倒だったとかじゃないんだからな！！

今変なナレーションが入ったような・・・？

「どうしたのショウゴお兄ちゃん？」

「いやなんでもない」

きつと空耳だろう、うん。

「俺、風呂に入ってくるから」

部屋にチェックインして早々、俺はそう言って部屋を出る。もちろん、返事は誰にも期待はしてないし聞く気もなかったが。

俺の目論見どおり、昼間に入っている人はいない。せっかく温泉に来たんだし風呂でまったりしようと考えた。誰もいないなら本当に

ゆっくりできるしな。

『拙も体さえあれば・・・!』

『お前は何をいつとるんだ・・・』

アホなことを言ってるフィフは脱衣所へ放置。頭と体を洗ってかけ湯をして湯の中に浸かる。

「ふいゝ・・・」

あゝ気持ちいい・・・。これは連れてきてもらえてよかった「ショウゴお兄ちゃん!」「なのは!待ちなさい!」「あ、あの二人とも・・・」た・・・?

「おまえら何してんの?」

バスタオルを体に巻いていきなり男湯に入ってきた三人に俺は言う。ちなみにフェレットはいない。

「お兄ちゃん!10歳以下はどっちのお風呂に入ってもいいみたいなのだ!」

うん、それは知ってる。

「それが今の状況につながる意味がわからない」

可能であろうとそんなことせんでいいのに・・・!!

「なのはお兄ちゃんと入りたかったのだ!」

「そうか。まあお前はまだいいや。小さいころから面倒見てるし。だがお前らはどうしてきた」

「べ、別にいいじゃない!」

「あ、あう・・・」

「あ、いや怒ってるわけではないんだが・・・なんで?」
「なんかさすが泣きそうなんで慌てて言い直す。」

「なのはが行くっていつから着いてきたのよ!悪い!？」

「わ、私もです」

どこまで仲よし三人組みなんだ・・・。

「もういいよ・・・。三人とも入るなら頭と体洗ってからな」

「「はい」」

元氣よく三人は返事をする。

「あ、お兄ちゃん洗って「却下」うう・・・意地悪」
「なにを言ってるんだこいつは・・・。」

その後は普通に全員で温泉を楽しんだ。そう、別にガチで水きりとかなのは達相手にやったりはしていない。断じて。

風呂からあがって部屋へと向かう途中、前から歩いてくる人・・・
「というかアルフがこちらに向かってくる。俺の顔を見てびっくりしてる。その表情に首をかしげる三人娘。」

「や、アルフ。おひさし」

「ちなみに昨日晩飯を作りに行ってるので別に久しぶりでも何でもない。」

「あ、あんたここで何してんのさ！それにその子らは・・・」

「ああ、こいつらは家族ぐるみで付き合いのあるところの子供だよ」

「へえ・・・そうなのかい」

「ああ、そうなんだ」

そんな会話をしているとのはがびくうと震える。大方アルフに脅かされたんだろ。

「それじゃね、シヨウゴ」

「ああ、フェイトによろしくな」

そう言つてアルフは温泉に向かつてた。そういや今も一人でフェイトは探索してんだよな？後でなんか差しいれに行こうかな？

「シヨウゴお兄ちゃん・・・」

「ん？なんだ？」

「フェイトって、だれ？」

あれ？なんでこんな黒いオーラ出してんの？なのはさん。魔王になるにはまだ早い気がするぞ？

「そのへんのところ話してもらいましょうか」

「シヨウゴさん、下手に隠しだてすると酷いですよ？」

え？なんで囲まれてるの？

シヨウゴ は 逃げられない！

てかすずかさん、なにが酷いの！？俺の未来が！？

で、時間はとび真夜中。多大な代償を払った気もするが、どうにか乗り切った。しかしフェイトのところにはいけなかったので、今度何か適当な理由を付けてご褒美をやろう。

そして今、何故か三人娘の部屋にしかれた布団で寝ている俺がいる。なんか保護者組は酒を飲んだり、カップルはどこか別の部屋に消えていったりで世話役を命じられたわけだ。

しかしこの部屋で寝る意味が全く分からん・・・。

それで寝る前には暇だからというわけで夏でもないのに怪談話をし
てなのはを涙目にしたりしたのもいい思い出？だ。アリスは追い打ちをかけることは予想できたが、まさかすずかがとどめを刺しにくとは思わなかった。おかげでなのはは俺に抱きついて眠っている。
・・まあ、きつとジュエルシードの発動した時には起きるだろ。

そうこうしてるうちにジュエルシードの感じ。フェレットがなんか言ってた。念話で。なのははそれで起きたようだ。俺はそれを見てトイレに行くと酔っぱらってる保護者達に言っ
て部屋の外へ出る。

トイレにちゃんと行って、外へ向かう。なのは達のいるところへ向かうと、ちょうどフェレットが転移魔法でどっかに飛んでくところだった。

今回は木の影から見守ることにする。

結果だけ言うとフェイトが勝ってジュエルシードをゲットした。で、なのははフェイトに名前を聞いて自分の名前を聞く前に飛び去っていく。

それを見届けて、なのはが帰ってくる前にさつさと部屋に戻ることにする。戻れば保護者共が布団も敷かず寝ていた。しょうがないのでそれら全員に布団をかけて自分の布団に戻る。

しばらくするとなのはが戻ってきて、自分の布団に戻らず俺の布団にもぐりこんですぐに眠る。

いつもならなのはを自分の布団に戻しただろうが、まあ今日くらいはいいか。と思いはのはの頭を撫でてから睡魔がすぐ来て寝た。

翌朝アリサ、すずかに問い詰められ恭也さんに殺気をぶつけられ後悔した……。

8話 喧嘩↓仲直り↓あれ・・・？(前書き)

なんという超展開・・・

8話 喧嘩↓仲直り↓あれ・・・？

「で？これはどういう状況だ？」

目の前には怒りで顔を真っ赤にしたアリサと申し訳なさそうな雰囲気を感じながらもどこか上の空な感じのなのは、そんな二人を見ておろおろとするすずか。

聞いてみると、こんな状況になったのは学校での放課後らしい。最近いつも上の空な様子なのはアリサがぶち切れて・・・というのが今回の真相。

で、俺がこのことを知ったのは、帰り道一人歩いてたのはを見かけ、どうしたのかを問うと正直に理由を教えてくれたため、アリサ達を招集。まだ稽古の時間には余裕があるとのこと（鮫島さんより）なので翠屋に集合させた。

「まずアリサ。お前は どうしてそんなに怒ってるんだ？まあ一緒にいる奴がいつも上の空だとむかつくのもわかるがそこまで切れる理由にはならんだろう？」

とりあえずこいつらには溜めこんでるものを吐き出してもらわんな。

「だって、むかつくもの！悩んでるのも困ってるのも迷ってるのも見え見えなのに、なのに私たちには何も教えてくれない。それに悩んでも迷ってもないなんて嘘なのに・・・。でも、それに力を貸せない自分に一番むかつく・・・」

とアリサは一気にいい、最後には泣き出しそうな始末。そんな様子のアリサの頭を俺は撫でる。

「そうだな。仲好の友達の困ってる姿は見たくないし、自分も力を貸してやりたいと思うのも当たり前だ。それが親友つてものだろうし。でも、それをちゃんとなのはに伝えてやったか？」
俺の言葉には返事を返さない。

「隠しごとをされるのはつらいだろう。ましてやお前らは今までそういうのがなかったもんな。でもさ、ということはなのはが今お前に話さないってことはそれだけ大切に大きなことなんだ。わかるな？」

アリサは頷いて応える。

「だったらさ。今はそれを見守っててやってやれ。全てが片付いた後、全部話してくれるさ。な？」

ここでなのはにいきなり振る。上の空状態だったが、それでも一応は聞いていたらしく、なのはも頷いて応える。

「それじゃ、仲直りな。せつかくこないい友達をお互い持てたんだ。些細なことで失っちゃうのは哀しいことだぞ？」

「ごめんね？アリサちゃん」

「ううん、こっちこそごめん」

俺が言っていると二人は向き合いお互いに謝る。これにて一件落着。こいつらが仲悪いのは見てられんがらな。

そして夜。なのはとは別でジュエルシード探し。確か街で強制発動・

・・のはずなので適当にその辺をぶらぶらと。

そして数十分したところだろうか、魔力の発動を感じた。それと同時に結界が張られる。きつとフェレットもどきが頑張ったんだろう。

「さて、 vijf セットアップ」

『了解じゃ』

いつものようにバリアジャケットを展開。すぐ動けるように準備しながら、なのはとフェイトのぶつかり合いを見る。

何回か撃ちあつた後、何かなのはが言つてフェイトがそれに動揺して動きが止まつたりしてたが・・

「あいつらっ!」

同時に封印して過剰魔力の余波で吹き飛ばされた二人がいた。

「フェイト!」

しかもフェイトは暴走したジュエルシールドを素手で封印しようとしている。

「これは俺がやる。下がってろ」

全力の全力。自身の魔力の3分の2を消費してどうにか、間にあつた。

「あなたは・・・!」

フェイトが何か言つてたがスルー。しかし・・・この状態はちとヤバいな。

『どうするのじゃ?』

ファイフもこいつに使ったらさすがにただじゃ済まないだろう。ならば・・・手は一つ。

腰にぶら下げてある物の一つである四角い箱の形をした中身綿の何の変哲もない物体。それを俺は手に取り、

ボックス
「箱・・・解放！」

その瞬間、箱は光り出し急速に魔力を内部に溜めていく。

『まずいぞ・・・容量が足らぬ』
そんなことは重々承知。だから、

「ぐっ・・・」

その内部に貯まった魔力を俺自身に流す。元々、空中の魔力素を取り込んで簡易カートリッジとして扱おうとしていたのだが、今回は無理やりジュエルシードから取り込み自身に流すようにした。

元の俺の許容量を遥かに超す魔力。それを取り込んだ代償として腕からは血が噴き出し、鼻血や目の毛細血管の破裂など・・・ドンドン身体を破壊されていく。

『シヨウゴー!!』

フェイトやなのはがいると言っのにその名前で呼ぶなよ・・・。

『そんなことを言っておる場合か!! さっさと離れねば死ぬぞ!!』
大丈夫だ。この程度なら耐えられる。

そうファイフに言っていると、余波に今まで耐えていたサングラスやらバンダナやらマフラーが吹き飛ぶ・・・あれ?これなくなったら・・・。

「「シヨウゴ（お兄ちゃん）!?!」」

ばれるわな・・・そりゃ。まあいい・・・これだけ魔力を取り込めば・・・。

俺の目の前にはすっかり鎮静化されたジュエルシード。それを体内で暴れまわる魔力を使って封印する。まあそれでも全然減らなかったが・・・。

よし・・・これ・・・で・・・？

ジュエルシードをつかもうとしたが何故か空を切る。次の瞬間、後頭部に衝撃。それによって自分が倒れたことを悟る。

ま、あいつらにケガがなくてよかったわな・・・。

そう思ってから俺は意識を失った。

9話 KY爆 殺！・・・してないよ？（前書き）

とりあえず少しでも投稿しようと思った結果のこれ
1/5ルートのつじつま合わせの為に内容を若干変更

9話 KY爆 殺！・・・してないよ？

「ぐっ・・・」

意識を無理やり起こされた感じがして、めちゃくちゃ気持ち悪い・・・。

『大丈夫か！？ショウゴ！』

手の中にあるフィフから切羽詰まった声。まああれだけ無茶をしたら当たり前か？

「どうにかな・・・今どんな状況かわかるか？」

身体の中にある魔力がぐるぐると渦巻いており、更にケガも酷いらしく動けない。

『とりあえず、マイスターがジュエルシードを無理やり封印し、あの娘どもに正体がばれたのは覚えておるか？』

ああ・・・そういえばサングラスとか吹き飛んだっけ？こりやしばらく家には帰れんな。

『続けるぞ？それでケガと過剰なまでの魔力を取り込んで倒れたショウゴにあの二人は近寄ってきたが、緊急時用に作ってあった『エスケープスカーフ』で強制転移。で、今の状況へとつながる』
そっぴやそんなものも作ってたなあ・・・。

エスケープスカーフ。その名の通り逃げるために作ったスカーフだ。これは装備している者、今回の場合は俺が気絶なりなんなりすると周囲にサーチ魔法やリーダー、魔力探知などを狂わせる特製チャフをばら撒き、霧のように周囲100メートル程の視界をゼロにする。その後、転移魔法を発動し、あらかじめ設定されている座標へと転

移させる。

ちなみにこれは一度使うとなくなる消耗品である。作るのも魔力をボックスから常時供給して初めて製作可能な一品で、むしろボックス使っても魔力がすっからかんになったりした。

後、これは一つしか作ってない。つまり・・・

「もう離脱手段なしってか？」

これはヤバい。どうしようか。もう一枚作るのは億劫だし・・・。

『そつえばシヨウゴ』

「ん？」

考え込んでいると、フィフから声がかかる。

『以前“魔力があるならこんなん作りたいなあ”と言っていたものがあるじゃろう？』

「そつえば何回かそれ言ったなあ」

『今溜まっている過剰魔力を利用すれば作れるのではないか？』

「あ・・・」

確かに今溜まっている魔力を使えば作れる。そう思ったら今まで動かなかった身体も動く。

「よし！作るか！」

腰のポーチに入っている布を取り出し、嬉々として俺は作り始めた。

翌日。服を作ったら魔力がすっかりなくなってしまったので、ボックスに貯めていた魔力を流し回復。体調も過剰魔力がどう作用したのかわからないが、ケガも全て治っている状況。

装備も完璧。後はジュエルシードが発動するのを待つだけ。今回はかの有名なKYさん達『時空管理局』が登場するはずなので出張らずを得ない。今のところ事前知識とある事情から敵意のみしか抱いていない。

だが、あのKYさん達がいづらと同じなのかどうかはわからない。それを見極めるためにも万全の状態で今回のことには挑む。

そんなこんなでフイフと話したり、隠れ家の中を片付けたりしてたら近くでジュエルシードの発動を感じたので現場に急行。

すでに現場ではなのは達が木の化物と戦っている。なら俺はこの後ご登場するKYの為に準備をしておこう。

派手な砲撃魔法が飛び、木の化物のバリアも吹き飛ばされジュエルシードが空中に浮かぶ。それを挟んでなのは達が向き合う。さて、頃合いだ。

二人は再びガチバトルをしようとお互い詰め寄ろうとしたその時！！

「ストップだ！」「空間翔転移！」がつ！

黒ずくめのKY君が二人のデバイスを止めると同時に、空中に急に現れた赤いバンダナを付け、裾がギザギザな外套を付けた青年によつて脳天からぶった斬られた。まあ血などは出てないので非殺傷魔

法か峰打ちなのだろう。

いきなりの急展開に二人は呆然としている。

「フェイト、さっさと逃げろ」

封印処理したジュエルシールドを青年が投げ渡す。あわててそれを受け取る。

「あなたは・・・」

誰？と聞こうとしたが、手に持っているのは自らがこの世界に来て優しくしてくれた青年のデバイスの形態。

「シヨウ「すまん、この姿の時はクレスで頼む」あ・・・うん」

「それじゃ、早く帰れ。もたもたしてるとあのKYが起きちまうぞ？」

いつものシヨウゴとは姿かたちが全然違うが、中身はシヨウゴだとよくわかる。

「その・・・ありがとう」

色々聞きたいこともあるけれど、それはまた今度会った時に聞こう。だから今は感謝の気持ちを伝える。昨夜、自分の身を守ってくれたことと、いつも助けてくれることに対して。また料理を作りに来てくれると信じて、フェイトはそう言った。

「ああ」

シヨウゴがそう答えたのを聞いて、フェイトはアルフを呼び転移していった。

9話 KY爆 殺！・・・してないよ？（後書き）

中途半端でわかりにくいと思う。作者も同じ気持ち。多分明日か明後日くらいに投稿する。

と思ったが、アンケート（この次にあります）によって登場人物とかわったりしますんで1週間後になります。すみません。

あと、クレス・・・わかる人いるのか？個人的には有名だと思っている。

余談ですが、活動報告or作者のブログ（作者のページから飛べます）に遊戯王のオリカ（なのは）を作って乗せてます。よかったら見てみてください。

壊れ性能なのは使用ですww

すみません・・・アンケートです

えゝ・・・今回聞きたいのはこれからの方針です。具体的にはもろ
Strikersに影響します。

1 管理局アンチ

2 管理局には入る・・・がアンチ気味というか、主人公暗躍ルート

3 ほぼ原作どおり

4 どれかorどれもやる。(番外編とかIFルートみたいにしてい

の四択です。期日は・・・結構猶予?あるので、おねがいします。

これをやろうと思ったのは作者的にどのルートの構想も微妙にでき
てるからで、たぶんどれに進んでも難易度的に変わらない気がして
(おい

とまあ、ずいぶんと他人任せな感じですがどうぞよろしく願ひし
ますです。

追記 すみません・・・これ選択肢によってめっちゃ内容変わります。
もっとも酷いのが登場人物の変化。ルートによってでなかった
り、陣営がめちゃくちゃ変わったりします。ので期限は1週間です。
どうぞよろしくです。

詳しい内容知りたい人は言って下さい。ここに記すなりメッセージ
を送ったりしますんで。

アンケート結果

アンケートの結果はこうなりました。

- 1 二票
- 2 一票
- 3 一票

票を入れてくださった いいちに俺様 機械屋様 水上 流霞様
月光閃火様 どうもありがとうございました。

次回からは大変な原作崩壊が起こるかもしれません。その辺ご注意を。

で、すぐに次のを投稿したいのですがs t sは二次創作でしか見ていないので、一度ざっくりと流れとかを把握するために見たいと思います。

すると、多分早くて大晦日、遅くても三が日までには投稿したいと思います。マジですいません。

そう言うわけですので、次回をお楽しみに〜・・・見捨てないでくださいね？（泣）

閑話：なのはの休日（前書き）

三が日はバイトでつぶれ、残ってた宿題の処理に追われてDVDを見る機会がない！！まあまだ2巻までしか買ってませんが（おいそんなわけで今回は幼少期が吹き飛び出番の少ないなのは主体のお話にしてみました。

閑話：なのはの休日

夢を、夢を見ました。それは私がまだ小さいころの夢で、お兄ちゃんに助けられて一緒に遊んで、始めのころよりずっとずっと好きになっただけのこと。

「おきくなったらおいちゃんとかんする〜！」
小さいなのはそう言いました。

「大きくなったらな」
そう言いながらお兄ちゃんに温かい手で私の頭を撫でてくれます。撫でてもらうとなんだか胸が暖かくなって、それももっともって感じたい。そう思って、私は・・・

「にゃー！ー！ー！」
なのははなのはははは！ーいや、お兄ちゃんと結婚・・・いいかも、じゃなくて！ー！

「あんな恥ずかしいことを小さいころのなのは・・・」
もうお嫁さんにいけない・・・もうお兄ちゃんにお嫁さんにしてもらうしか・・・。

「なのは？早くしないとショウゴ君きちゃうわよ」
自分の娘が約束したと言った時間になっても降りてこないの母親の桃子は朝ごはんをつくりながらそう言う。

その言葉を聞いて、なのはは急いで準備を始めたのだった。

これはなのはが魔法に出会う少し前にあったとある休日の話である。

「ありがとうございます」

道場で恭也さんと向き合ってお互いに礼をする。

「お前もあの人達に会ったあたりから随分と急成長したな」

木刀を元の場所に戻しつつ恭也さんはそう言う。

「まあ・・・あんなところにいきなり拉致られたら誰でもこうなりますよ」

そう言いながら思い出すのは、歩いている時に急に俺を気絶させ戦場の真つただ中に落つことした腐れ獅子舞隊長の顔。あの人の率いる部隊・・・というか所属しているあの会社？自体が色ものすぎた気がする。

生身でデイベインバスター並みの砲撃のようなものや雷、炎etc
・を放つ幹部の皆様。魔法？なにそれおいしいの状态だったあの
ころを思い出す。

そのことを思い出してるショウゴはどこか諦めとか悟りを開いてヤ

バめの顔になっていたので恭也は慌てて現実の世界に引き戻した。

「そう言えば今日はなのはと遊びに行くそうだな」

そうつぶやく恭也さんの声はどこか棘を感じる。長い付き合いでこれでも大分柔らかい反応になったのだ。始めのころなどリアルに殺しに来てたからなあ……。必死で生き残ろうとしていたため、おかげで異常なほどの危機察知能力と回避能力、戦闘限定の直感を手に入れることができた。

いやはや、しかし今俺がここにいるのはその経験のおかげといっても過言ではない。それだけ密度の濃すぎる人生を送ってきたのだ。それらに関してここで語るのは時間が足りないので割愛させていただく。

それよりも今日のことだ。小学校に入り、親友と呼べる友人――

――アリサやすずか――を得ることもできたのだけど、いまだに俺に懐いている。ぶっちゃけてしまえば実の兄である恭也さんよりも。

それは置いておくとして、最近は三人娘全員と遊ぶか俺抜きで遊んでいたのだが、久しぶりに休日を二人で遊びたいとなのは言っていたので快くその誘いを受けたのだ。これで年齢が高校生とかならデートとか呼べる代物になるかもしれないが、今の年齢なら我が子と休日を満たす父親の気分になるのがオチだ。いや、普通は妹だろうと思うだろうが俺にとってはそう思ってしまうのでしょうがない。

おっと、思考がそれにそれまわったな。

「ええまあ。わがママを言うことの少ないのはの願いですし叶えるのが兄というものでしょう」

俺がそう言つと恭也さんも同じように思うのか、ああ。と短い肯定の返事を返してくれる。

「それがわかるのならばなのはを泣かせるような真似はするなよ？ お前がそういう人間じゃないのは知っているが、念のためな」

「わかってますよ」

そう返すと満足そうに、そうか。と言つて、お風呂に向かつていった。

さて、俺も早く準備してこないとな。そう思つて荷物をぱつとまとめて自分の家へと向かった。

「おまたせなのは」

準備を済ませなのはの家に向かい、玄関の扉に背を預けて立っているのはに声をかける。

「う、ううん！別に今出てきたところなの！」

俺の姿を見て顔を赤らめて勢いよくそう言つ。

「顔が赤いが・・・風邪か？」

もし体調が悪いなら無理させるのは良くないんだが・・・。そう思いながら自分の額となのはの額に手を当て熱があるか確かめる。

「ふむ、ちよつと熱い気もするが・・・大丈夫か？」

そう聞いてみたがなのは顔を更に真っ赤にして何度も頷いた。んゝ・・・いつもこんなことぐらいならやってると思うんだが・・・なんかあったのか？

まあ、後ろめたいことをやったとかじゃなさそうだし詮索はしないでおこうか。

そう結論付け、なのはに手を伸ばす。

「ほら、行くぞ。なのは」

俺の言葉を聞き、次に俺の手を見て、

「うん・・・」

小さく俯きながらそう言つて俺の手を握った。

「さてやつてきました遠野町」

「いきなりどうしたの？お兄ちゃん」

ここに来るまでになのはいつもの調子に戻り、バスを降りた直後の発言にツツこむ。

「いや、これ言わないと今何処にいるか（読者の皆様が）わからない気がする」

まあメタな発言はこの辺でやめておこう。なのはにキチガイの人を見るような目で見られたら生きていけない。

「で、なのはは何処に行きたい？」

「うん・・・」

それから数分考え込んでいたが、結論は「お兄ちゃんが決めて？」とのことだった。いきなり聞いても思いつかんかな、やっぱ。とりあえず行つてはずれのないところといえば・・・

「デパートかな」

思い立つたが吉日。早速向かうことにしよう。

「デパートに来たのはいいが・・・どうするかねえ」

これが男友達ならゲーセンに速攻で向かうんだが・・・。ここはウインドウショッピングとかのほうがいいのか？女友達とかと遊びに行くことはないのだから・・・。

「あ、お兄ちゃん！あっちあっち！」

これからのことを考えてるとなのはが腕を引っ張って俺を呼ぶ。そして、なのはの指さすところを見ると・・・

「ゲーセンですか・・・」

なんと女の子らしくない選択であった。

「お兄ちゃん！これやる！」

「はいはい・・・え〜つと・・・」
なのはが選んだゲームは射撃ゲームであった。

「こんなところから片鱗が・・・」
この子の未来は決定されていると言うのか!!と思ってしまう。まあ、しょうがない。やりたいと言うなら付き合おう。

このゲームはSFとファンタジーが混ざったゲームである。プレイヤ―は銃か杖を選ぶことができる。
武器にはそれぞれ特徴があり、
銃は弾速が速く速射力もあり弾の補充も安易だが威力が低い。
杖は威力が高い・・・なのは的に言えばアクセルシューターとかみ
たいな誘導弾が放て、ゲージが溜まれば高威力の砲撃も放てるが、
弾の数は少なく必要な魔力の回復率が遅い。

魔法というファンタジックな物に憧れてか、なのはは杖を選択。手
にとつて振るうその姿が異様に様になっているように見えるのはど
うしてだろうか・・・。

まあ、なのはのサポートに回るし使った経験もある銃を今回は選択
おもちゃにしては実に精巧に作つてある。重さも大体同じくらいだ
し。種類はマシンガン。理由は弾幕張つて時間を稼げばなのはが砲
撃でどうにかするだろうという判断の元である。

準備もできたところでゲームがスタート。舞台はどこかの廃墟。ど
こかラクーンシティみたいに見えるのはこの前映画を見たせいだろ
うか。それは置いて、画面の横から現れてきた敵は三頭身の丸
っこい青を基調としたボディに猫の髭。丸い目の中にぼつんと書か

れた黒目が妙にプレッシャーを放ってくるように思える。そして何より額に『ろぼ』と書かれている。
存在が著作権的に危ない物体である。

それを見た俺達は、ブツ。と吹く。こんなもん敵に出すなよ！！い
ろんな意味でヤバイぞ！！

そんなことを思っているうちに、てけてけてけっという足？音を立
てて向かってくる。それに対してすぐさま立ち直り、銃弾をばら撒
く。1面というところもあって当たり所が良ければ一撃、普通にあた
れば二発〜三発程度で仕留めれる。

次々と現れるアレを俺が撃滅しまくってるのを見てなのはも再起動
初プレイとは思えないほどの精度でシューターを放っていく。当た
れば一撃で粉碎、なかなか恐ろしい。

ビルの屋上から落下傘で次々と降りてきたりしているアレを一機も
逃さず落としていく。それを見ながら地上で迫ってくる奴らをせん
滅していく。

そして、1面のボス戦。出てきたのは二体のアレ。外見的に変化は
ない。それを見て本当にボスなのか疑ったが、とりあえず一撃を加
えてみる。

結果、当たった部位が吹き飛ぶ。中途半端な回避をされたため顔が
半分残ってお子様にはあまり見せたくない絵になってしまった。

顔の半分が吹き飛んだ次の瞬間には、なのはが同じタイミングに放
って弾速の関係で波状攻撃のようになったシューターがもう一体を
襲う。胴体に当たって爆発。頭とポケットの二つに分かれる。

その光景になのは軽く目を逸らす。まあ、小学生が見たらアレが
ぶっ壊れたように見えるのでしょーうがないと思う。

しかし倒したはずなのにステージが切り替わらない。どうしたのか、そう思った瞬間、

「なっ・・・!!」

「にやつ!？」

見たら、壊れた半顔の部分に触手が絡まり元に戻る。頭と胴体が真つ二つな奴も触手が互いに絡まって復活。正直言ってキモイ。男の俺がこれなら女の子のなのは・・・

「にゃーーーーー!!!」

絶叫しながらシューターをぶっ放しまくる。異常な再生能力以外は先ほどまで出てたアレらと変わらないみたいで、なのはの放つシューターを避けれずにくらいまくる。しかし、壊れた箇所が片っ端から再生していき、なかなか倒せない。

そして、なのはのエネルギーはゼロになる。ゼロになると回復力が1/2になるみたいでゲージの溜まる率が少ない。なのはからの攻撃がなくなったためアレらは完全に復活し、こちらに向かってくる。マシンガンで弾幕を張ってみるが多少遅くなっただけで少しずつこちらに向かってくる。

ちよっとヤバいかなあ・・・。と思った時、なのはのエネルギーゲージの上のゲージがマックスになった。砲撃のゲージである。どうやらちびちびと溜めてきた分がここで功を奏したようだ。

「なのはっ!」

「うん!」

俺の言いたいことがわかってるのか杖をアレらに向け砲撃の発射準備にかかる。その間にも俺は弾幕を張り続け時間を稼ぐ。

そして、アレらがこちらに到達しそうになったその時、

「これが私の全力全開!!」
なにか言う場面が違いますよなのはさん。なのはの発言にそう思ったが、まあ何も言わないでおく。
そして放たれる極太のビーム。あれをぶっ放しまくる時が来るんだなあ……。そう思うとなんだか悲しくなる。せめてトリガーハッピィにならないように教え込んでおこう。機会があれば。

あの砲撃で塵も残さず消え去ったアレ。一部も残らなかったら復活しないらしい。アレらが消え去った瞬間『YOU WIN!』の文字が浮かび上がる。次のステージに進むかどうか聞かれたが、あんなのが出てくるのはごめんなので『いいえ』を選択し、その場を去った。

あのゲーセンの後は服屋に行って「これ似合う?」と聞いてくるなのはに「似合うけどその程度なら作ってやるよ」と言って「じゃあこれと……」みたいな感じで色々見て回った。

「楽しかったか?なのは」

「うん!」

横で手をつないで歩いているなのははとても嬉しそうな笑顔で頷く。

「そうか」

それはよかった。そう思いつつ、他愛もない雑談をしながら俺達は家路へ着いた。

閑話：なのはの休日（後書き）

どうでしたか？ちなみに主人公の過去拉致られた部隊はとある漫画の部隊です。あれだけの情報でわかる人いたら凄いよね。

しばらくはDVDを見る機会がないので他に見てみたい人の閑話を書きたいのですが誰がいいですか？

IFということでもまだ登場してない人でもいいですし、他作品の方でも大歓迎です！

なにもなければ期間は空きますが、次回は本編ということになりますので。

ではまた次回。

最後に一言。アレは決して『ド』から始まるネコ型ロボットではない！

10話 女狐登場。しかし空気になるキャラ多すぎないか？（前書き）

とりあえず、STSは皆様の二次創作及びwiki先生で基本はどうにかします。どうせオリジナル展開になるんだ！どうにかなる！の精神で（え

10話 女狐登場。しかし空気になるキャラ多すぎないか？

さて、フェイトも無事帰ったことだし。

「なのはももう帰りな」

「えっ!？」

いろいろ超展開すぎて呆然としていたのだが、俺に話しかけられて再起動。

「ここにいるとロクなことにならないからな」

主に女狐とか女狐とか女狐とか・・・アレが出てくる前に帰らせておきたかったんだが、俺のそんな願望は叶わず、

『すみません、待ってもらえますか?』

空中に急に現れるモニターのようなもの。そこに映るのは遺伝子がどう変化したらとそうなると思う緑の髪を持った女性。

しょうがない。どうにかここは切り抜けよう。なのはには念話でなんて言われても何も反応するなと言っておく。

「何故だ？俺達がお前らの指示に従わなければならない理由が何処にある」

『管理局の魔導師を襲ったあなたやロストログアの収集をしているその子に事情を聞くだけよ』

「それがどう理由につながる？この地球には管理局なんて組織は存在しない。そんな存在を俺も知らないしな」

実際はこの世界にも入り込んでたりして特戦部隊時にあつてたりし

ている。その時は問答無用でフルボッコにしておいたが。

まあそんなことは置いといて。

『魔導師であるあなたが知らないはずがないでしょう』

「そんな確証が何処にある？俺はこの世界出身で偶然流れ着いて発見したデバイスとやらに魔法の存在は聞いていたが、管理局なんてものは知らないぞ？その少女も同じだ」

名前は多分知られてないはずなのでできるだけ本名は喋らないようにしておく。なのはにもその旨を伝え、この土壇場で『偽名考える』と無茶振りしておく。軽くこっちを睨んでいるがスルー。

『そうですか。ではこちらのこともお教えしたいのでこちらに来ていただけますか？』

「身元の不明な組織の拠点にホイホイいくほどバカではないのだが、そんなに話がしたいのならばこちらの時間で明日の12時にここに来い。お前とそこの黒いの、その他最低限度の人員のみで来いよ？これを破ったら・・・殺してやろうか」

人殺しに関してはなれてはないものの、忌諱感を持つてない。これも部隊の時のたまものである。それに今はとある物もあるのでスラックだろうがバッチこーいである。白兵戦は最低限度しか鍛えてないだろうからすぐ殺れるだろう。

『・・・わかりました。ではそれをお受けします』

とりあえずバカではないらしい。特にどちらにも不利のない条件。それで話が聞けるのであるのだから上々といったところだろうな。

「じゃあそう言うことで。行くぞ」

結局最後まで一言もしやべらなかつたのはには何かご褒美をやるう。

「ねえお兄ちゃん」

帰宅の途中、なのはと俺は手をつないで帰っていた。

「どうした？」

「あの人たち・・・悪い人たちなの？」

「どうしてそんな結論に至ったか聞こうか」

どこか俯いて考え込んでいる状態でそのままなのは話し続ける。

「お兄ちゃんがあそこまで怖かったのが一番の理由。でね？お兄ちゃんが喋るなって言うからずっと二人の会話を聞いてたけど、あの女のひとの喋り方・・・なにか嫌な感じがしたの」

ふむ・・・まあなのはは人の感情に敏感だからな。相手の向けてくる感情はある程度わかるって言ってたし。

「まあ・・・あいつら自身が悪い奴らなのかは知らん。ただ、あいつらの所属している組織の上層部は悪い奴らだな」

部隊のバックにある会社がどうやったのかは知らんが管理局の上層部に関して調査してきたことがある。そしたら出るわ出るわ。違法研究所は序の口、組織予算の横流しに他の派閥との抗争のとはっちりで死ぬ平の魔導師、賄賂とか人身売買etc・・・極悪非道と呼ばれることは大体やってた。その証拠映像やら書類はデバイスを持

つてる俺ももらっておいた。使うときが来るだろうと思って。

「じゃあなのははどうすればいいの？」

ユーノを助けるために始めた魔法少女。途中色々あって今はフェイトの為に頑張ってるが・・・

「お前は どうしたいんだ？」

こいつの本心を聞いて俺がどうするかを言おう。あくまで自分の道は自分で切り開けと教えてきたのだから。なのはもそれをわかっているのか、すぐに答えを述べた。

「わたしはフェイトちゃんとお友達になりたい。それだけだと思う」
もちろんジュエルシードも集めなきゃだけど・・・。とその後にくくわえた。

まあ、ここまでまつすぐな瞳なら大丈夫・・・かな？

「俺はフェイトを助ける。そしてなのは、お前もだ。お前らは俺の大切な者だからな。それを助けるためなら全力を尽くす」
その為にはまずプレシアと会う必要があるがな。

俺の言葉を聞いて嬉しそうに頷くなのはを見ながら、俺はこれからどうするかを考えるのだった。

10話 女狐登場。しかし空気になるキャラ多すぎないか？（後書き）

ちなみに空気キャラ筆頭のユーノ。彼は管理局の方に行きました。

具体的にはあのまた明日辺りのところで。

そしてKYはずっとピヨってました。

11話 下準備は大切である（前書き）

今回からだんだん原作から離れていきますよ？
作者の無い頭しぼって考えた穴だらけの物語を読む覚悟はできたか？

11話 下準備は大切である

あれから少しして高町家についた。本来ならここで別れていくけれども、管理局が来たためやることをやっておくことに。

「なのは、士郎さんたち呼んできてくれ」

「ふえ？うん、わかった」

「で？シヨウゴ君。俺たちを集めたのはどうしてだ？」

居間のテーブルで俺の前に座っている士郎さんが切り出す。

「最近なのはが夜に出かけてるのは知ってますよね？」

俺の言葉になのは以外が頷いてるのを見てなのはは狼狽している。自分ではばれてないつもりだったんだろう。だが、ここにいる桃子さん以外は御神の剣士。魔法が使えるだけのなのはの隠行ではばれるのも当然である。

「今回はそのことについてのお話です」

それから俺は説明した。魔法のことやシュエルシードのこと。途中

で信じてもらうためになのはにシューターを作って飛ばしてもらったりした。

それらの経緯などを説明し終えて、本題に入ることにする。

「ロストログア・・・ジュエルシードを回収するために現れた時空管理局という組織がやってきまして。そのことについて詳しく話したいんですが・・・」

組織の内部状況を説明するためにデータを見せようと思ったが、桃子さんにはさすがに見せられない。そのことを士郎さんに目で伝える。

「桃子・・・すまないがここで待っていてくれ」

士郎さんがそういうと、桃子さんは考えるようなポーズをとって俺を横目に見てきたので頭を下げる。

「・・・わかったわ」

桃子さんがそういった後、俺と士郎さん、恭也さんの三人は別室へと移動。そして管理局の腐敗振りを見てもらう。

結果

「さて・・・（管理局を）潰しに行くか」

どうやったのか瞬時に完全武装に入る二人。それを見て俺はあわてて止める。この二人だったらやれそうな気もするけど今回は自重してもらわねば。

幸い今回来てる局員はこういうのに関与してない下っ端のようなものだから、と説明したら思いとどまってくれた。

やるべき説明も終わったところで次の場所へ移動することに。「晩御飯一緒にどう？」と誘われたが「行くところがあるので」と今回は断る。

そして向かったのはフェイト宅。念話で連絡をしておいたので着いてすぐに部屋の中に入れてもらう。とりあえず二人にご飯をささつと作ってテーブルで向かい合わせに座る。

「で？ ショウゴは結局魔導師なのかい？」

「そうだな。隠しててすまんかった」

頭を下げて謝罪。てかアルフがそこまで警戒してないのは何でだろうか。

「いや、まあフェイトに危害を加えるような真似はしないんだろ？」

「それは約束する」

これは断言する。ここまでかわつたらハッピーエンドを目指したいし、実際に話して助けたいと思ったしな。

「なら私からは言うことはないね」

そう言つてアルフはまた食べ始めた。それを見て、今度はフェイトが口を開く。

「どうして今日ここに来たの？」

「お前の母親に少し用があるんだ。これ食ったら報告ついでに連れてってくれる」

「・・・なんで母さんに？」

「管理局が出てきたからな。色々話したいことがあるんだよ」

というのは建前でプレシアさんがどんな人なのかを確かめに行きたいだけである。

それに言ったこともそれなりに本場で、プレシアさんが話のわかる人なら対策と一緒に練りたい。

俺の言ったことについてしばし考え、

「わかった。一緒に行こう」

OKを出してくれた。それならば、と全員さつさとご飯を食い、洗いものは水に浸けておく。

そして屋上へ向かい、プレシアさんの居る場所・・・時の庭園へと向かった。

11話 下準備は大切である（後書き）

矛盾点とか気になる点があったらドンドン感想に書いてください。
まあ批判されまくったら俺泣きますけどね（汗

12話 うゝむ・・・行けるか？ダメか・・・

というわけでやってきました時の庭園。長い間放置されっぱなしにされているようで花は枯れ、雑草は伸び放題の景観ぶち壊しな感じに仕上がっている。

そんな様子を見ながら俺はフェイトについて建物へ向かう。中に入って見たのは長い廊下に広い空間。

右に行ったり左に行ったり・・・だんだん暇になってきた。が、フェイトには話しかけづらい。そんな空気が見える。というわけで、フィフと話すことにしよう。

シヨウゴ『フォトンランサー』フィフ『アインス』

『スターライトブレイカー』『アーガイル（数色からなる連続の菱形の柄）』

『ルールブレイカー』『アーキー（インターネット上のAnonymousFTPサーバーにあるファイルのリストを検索しダウンロードするためのソフトウェア）』

『イマジンブレイカー』『アーキテクト（建築家）』

『トランザムライザー』『アーク（円弧）』

『クロノ・トリガー』『ア、シヨウゴ、ついたよ』

引き分けのようじゃな』

「そうか」

どうやらフィフとのしりとりで熱中しているうちについたらしい。決着は後で付けるぞフィフ。

「母さん、ただいま」

そう言いながら入るフェイトに続き俺も入る。一応ポケットのフィフに手をかけてつつだが。

「その男は？」

俺を見ての第一声。そして目を見て・・・フィフを握る力を強める。

「向こうに住んでるフリーの魔導師のショウゴ」

「どうも」

そう言いながらフェイトより一步前へ出る。

「そう、あなたが来た目的は何？」

「こちらにきた管理局をどうするか話すためですが」

俺はプレシアの目を見ながら話す。目の色が変わった。それを感じて俺は自然体ですぐ戦闘に入れるよう力を抜く。

「フェイト、あなたは少し部屋へ行ってなさい」

「え？」

急にそう言うプレシアにフェイトは戸惑いの声を上げる。

「母さんの言うことが聞けないの？」

「・・・はい、母さん」

俺を横目に見て、プレシアを見、部屋から出ていった。

それからすぐに結界が張られる。ごく丁寧にも外にはわからないようになっている。

それを感じてすぐに後ろへ跳躍、及びバリアジャケットを展開。さらにマフラーとマントを付ける。

見ると俺の居たところは黒焦げになっていた。

「やれやれ・・・ファイフどうだった？」

『黒じゃ。洗脳魔法が掛かっておる』

やっぱりか。ファイフの言葉を聞いて思う。プレシアは何か暗示にかかっているような奴の目をしていた。特に戦場とかで見る死をも恐れぬ兵士となってくるときになってる目だ。あれと同類だとすると、少し厄介である。

「邪魔者八排除スル」

平坦な声でそう言いながらプレシアは雷を放つ。それを横に飛んで避け、プレシアに向かって走る。

プレシアはフォトンスフィアを生み出して弾幕を張る。それをファイフで斬るなり避けるなりして前へ進む。

後もう少し、というところで足に何かが引っ掛かり前へつんのめる。見るとそこにはバインド。対魔導師戦の少なかったので気を付けてはいたのだが、ダメだったようだ。

そして、俺の周りにはたくさんのフォトンスフィア。

「消エナサイ」『Photon Lancer Phalanx Shift』

プレシアの言葉をトリガーに何十何百何千のフォトンランサーが発射される。その一発は壁や地面を抉るほどの威力を持つ。粉塵が舞い、様子は見えないものの生きてはいないだろう。そう思ってプレ

シアは結界を解こうとして・・・

「捕えろ」『アイン・グレンズ』

バインドによって縛られた。手足の親指や口元を主に縛られ、身動き一つ取れない。

「危なかった・・・対プレシア用装備でなければ即死だった程に」
そう言いつつ俺は粉塵の中から歩いて出てくる。その姿はボロボロ。

「どうして生きてるか、と思うか？」

洗脳されているのでそんなことを思うかと言われればありえないと思うけどさ。

「それはだな、俺の能力で作ったマフラーとマントのおかげだな」
プレシアの方へ歩きながら一人語る。

「あのマフラーとマントは『雷耐性』と『自動防御』を兼ね備えた素晴らしいものだったんだ」

しかし、先ほどの攻撃で軽く吹き飛んだ。Bランクでは条件付きSランクには勝てなかったという・・・。

「ま、そんな理由があったわけだ」

プレシアの元へとたどり着き、フィフを構える。

「痛いかもしれんが我慢しろよ？フィフ」『了解じゃ』

「あああああああー！！！」

フィフから光が放たれ、プレシアを包み込む。それと同時にプレシアは悲鳴を上げた。

それから数十秒、光は収まりプレシアは気絶した。

とりあえず、このまま転がしとくのもなんなのでプレシアの寝室を探し出し運び込む。

ベッドの上に寝かしてさてどうしようか。プレシアが起きるまで暇だし・・・フィフと決着を付けるか。

5分後。

「くそっ・・・負けた・・・」

『ふふん、拙に勝つには10年早いわ』

デバイスに負ける魔導師の姿がそこにはあった。

「んん・・・」

しばらくorzしているとプレシアから声が上がる。どうやら起きられたようだ。

上半身を起こし周りを見て、俺の方を向く。

数十秒見つめ合ったかと思ったら、

「きゃあああああ!!!!」

悲鳴と共にフォトランサーが。それを条件反射で避け、反撃を加えようとするがなんとか押しとどめる。

「すまん、大丈夫か？」

「え、ええ・・・」

首元まで手が伸びてたので危なかった・・・。

「さて、あんたは何処まで覚えてる？」

少し深呼吸をしてプレシアが落ち着いたようなので一番聞きたいことを聞く。

「あ・・・わ、私は・・・！」

俺の言葉を聞いてプレシアの顔は一気に顔が真っ青になった。

「落ち着け！」

そのまま恐慌状態に陥りそうだったプレシアを一喝して呼びもどす。それでどうにか落ち着いたプレシアを見て話を再開する。

「とりあえず、過去のことは忘れろとは言わんが気にするな。そんなことをするくらいなら今までの分も愛情を持ってフェイトに接してやれ。それがあの娘の願いだから」

「・・・ええ、そうね」

「じゃあ話を続けるぞ。アンタに洗脳魔法をかけたのは誰だ？」

俺がそう言つと顔をしかめるプレシア。まあ自分にそんなもんかけた奴の顔を思い出せばそうもなるか。

「・・・管理局の高官よ」

ここで管理局か・・・。まあ予想はできたけどさ。

「私にプロジェクトフェイトの存在を教えて・・・それから記憶が

あいまいだけれど何度もこっちに来ているから十中八九あいつがかけたのでしょーうね」

口惜しそうにプレシアは言う。フェイトを虐待することになったのもあいつなのだから当然だろう。

「さて、その管理局が今回出張ってきたんだが・・・どうする？」

「そうね・・・あなたは どうするの？」

「俺か？俺は交渉次第だが・・・決裂すれば関わらないだろうな。こっちの目的は達成したも同然だし」

ちなみに目的というのはフェイトの救済とフェイトがなのはと友達になること。今のこの状況なら叶っているも同然だ。

「ちなみに交渉って何をするの？」

「ん・・・俺たちのことを本局に伝えないことを条件に手伝う、かな。下手に伝えられたら管理局による強制拉致が起こるだろうし」
万年人不足の管理局では管理外世界から魔力資質を持った人を拉致してたりする。不正の中の一つである。魔法がない世界なので次元船に乗せてしまえばあちらの物。洗脳魔法も使いながら言いくるめ、戦力とする。そんな目になのはは会わせられないのでこれが条件だ。ちなみに、これが了承されなかったらジュエルシードは渡さず帰る。隠蔽技術ならお手の物なのでサーチも不可にできる。最悪士朗さん達も巻き込んで奇襲すれば殺れるだろ。

「そう・・・。それなら私たちはあなたに従うわ」
ん・・・？

「あなたは私たちの恩人だもの。できるだけ力は貸すわ」

「そんな大げさな・・・」

やりたいことをやっただけ、と俺は思っているのだが。

「いえ、それでもっ・・・ゴホッ」

言葉の途中でプレシアは咳き込む。口に当てた手には血。

「フイフ！」『アイン・ディグノース』

右手にフイフを持ってプレシアの胸の前に手をかざす。数十秒して手を元に戻す。

「これならなんとかなるか・・・」

先ほど使ったのは診断魔法。身体の異常を調べるときに使う。で、今回調べてわかったのは肺にのみ病魔が巢食っていること。リンカーコアにまで広がっていたらヤバかったが、よかった・・・。

症状もわかったところで腰のポーチから必要な布とかを取り出し、目算でサイズを測って印を付けてフラッシュムーヴを使って高速で仕上げていく。並列思考と思考加速、そして高い裁縫技術を駆使して縫い上げる。初めて使った時に『才能の無駄遣いじゃな』とフイフに呆れられたのはいい思い出だ。

そんな感じで十分程度、簡素なカーディガンを作り上げる。名前は・
・

「癒しのカーディガンとかでいいか」

『ネーミングセンス皆無すぎじゃろ』

「うるせえよ」

そんなことは俺自身が一番わかってる！

「とりあえず、プレシアはこれ着て」

俺の秘技を見て呆然としているプレシアの肩に掛ける。

「これをできるだけ着てたら1ヶ月〜2カ月くらいで治ると思う」

「それって・・・どういうこと？」

「あゝそれはだな・・・」

それから簡単に俺のレアスキルの説明。前例がなかったらしくめちやくちや驚いていた。

「しばらく寝てろ。俺はフェイ」わたしも行くわ」早いなおい・・・

「

「今までの分も謝って謝って・・・本当のことを話すわ」

本当のこと・・・。

「さっき言ってたプロジェクトフェイト、とかいうのか？」

さっき口走っていたが一応俺は知らない人間なので、そこんことを聞いてみる。

「ええ。プロジェクトフェイト。使い魔を超えた人造生命体を作る

技術よ。私はそれでフェイトを生んで、アリシアの記憶を植え付けたの。狂ってた私にはあの子を受け入れられなかったようだけど・・・

「・」

「いいのか？それを聞いてフェイトがどう思うか・・・」

「いいの。どう思われてもそのことを話さない限り本当の家族にはなれそうもないもの。それにあの子はアリシアじゃない。アリシアの妹で・・・私の娘だから」

「そこまで覚悟しているのならいいさ。でもまずは身体を休めろ。俺と戦って少なからずダメージは負ってるんだからな」

「・・・わかったわ」

俺の言葉に渋々ながら従ってプレシアは布団の中に潜る。寝息を立てるまでそれを見て、俺は立ち上がる。

とりあえず起きるまでフェイトのところに行こう。そう思って俺は部屋から出ていった。

12話 うゝむ・・・行けるか？ダメか・・・（後書き）

難しい・・・。なにか問題点あったらジャンジャンどうぞ。あまりにも酷かったら書き直します。

13話 いやはや・・・微笑ましい限りだ（前書き）

ごめん・・・書いてたら良くわからないものになった

13話 いやはや・・・微笑ましい限りだ

プレシアは結界を消し、眠りについた。それを見てから俺はフェイトのいる部屋へと向かう。

コンコン

「フェイト、いるか？」

「あ、シヨウゴ？」

中から顔をフェイトが出す。

「母さんは？」

「ちょっと疲れがたまってたみたいだな。今は眠ってるからそれを伝えるに」

「そう・・・」

プレシアが眠っていて会えないので少しさみしそうである。どうにかしてやりたい、ので一つ提案してみる。

「フェイト、プレシアに料理を作ってやろうぜ。起きたら腹すかしてるだろうしさ」

俺が教えてやるからさ。そう言うとフェイトは少しぽかんとしたが、俺の言葉を理解し、

「うん！」

元気良くなずいた。

プレシアは目覚めて第一に感じたのは何やらいい匂いがすること。どうやら誰かが料理を作っているらしい。この時の庭園にはご飯を作る存在であったリニスは現在不在というのに、作っていることに關して何にも思わないのはきつと彼女が起きぬけは頭が正常に働かないからであろう。

ぼくとした頭のまま身支度も整えずにキッチンとつながった居間へと向かう。そこで彼女が目にしたのは、オムライスが盛つてある皿をテーブルに運ぶフェイトと机の上を拭いているアルフの姿。

アルフはプレシアが現れると威嚇をするも、どこか様子が変わることに気づく。そんなアルフの様子に気づかず、

「フェイト、アルフ・・・おはよう」

今だ回転数が上がりきつてない頭のまま普通の母親のようにフェイト達に接する。

「あ、母さんおはよう」

フェイトは挨拶をされたらきちんとし返すように教育をされているため半ば反射的に挨拶をする。

プレシアはフェイトに近づき、目線を合わせるようにしゃがむ。

「これ・・・フェイトが作ってくれたの？」

「うん・・・ショウゴに教えてもらいながらだけど。母さんがお腹すかせてるだろうから喜ばせてあげようと思って」

フェイトはプレシアの様子がいつもと違うことに気づいていたが、

今まで望んでいた優しい姿で接してくれることでそんなことは頭の中から吹き飛んでいた。

アルフはプレシアの様子に絶句状態で固まっている。

「フェイト・・・ありがとうね」

フェイトの言葉を聞き、本当にうれしそうな顔でフェイトの頭を撫でる。本当は抱きつきたかったが、オムライスがあるので自重した。

プレシアに頭を撫でられて擦ったそうにしつつも、嬉しそうな顔のフェイト。それはごく普通の親子の様子であった。

「ようアルフ、どうした？固まって」

プレシアとフェイトがごく普通の親子のように接しているのを見て、気配を同化させて気付かれないようにアルフの横までいく。というか、プレシアのやつ頭が回りきってないな。昨日の様子だとフェイトの前に出た瞬間、罪悪感でいっぱいになってクルクル目を回しそうなのに。

「うわっ！ショウゴ！いきなり隣に現れないでくれよ・・・」

「いや、（気配を同化させて）普通に歩いてきたんだが」

「・・・なにか抜けてる気がするけど、まあいいや。それより、プレシアの奴どうしたんだい？前まであんなにフェイトに酷いこととか母親のようなことを一つもしてなかったのに」

あゝ・・・そういやプレシアのやつにフェイトが色々暴行とか受け

てたからアルフはプレシアのことが嫌いなんだっけ？つーかここで本当のこと話したら管理局に入らんようになるだろうなあ・・・いや、そっちの方が好都合か？あんなとこにフェイトやアルフは連れていかれたくないし。

そう結論を出した結果、プレシアが実は管理局の高官に洗脳魔法をかけられてたんだよーと話す。

結果

「な・・・！そんなのって・・・っ！」

信じられないことを聞いたとばかりにうるたえた。まあそれもしょうがない。管理世界では管理局は“正義の味方”の認識なのだから・・・。馬鹿らしいにも程があるが。

「とりあえずフェイトには伝えるなよ」

明日は管理局と会うのだ。このことを伝えたらどうなるかわからんし、せめて交渉が決裂するか決まるまでは言わないでおくべきだろう。

「あ、ああ・・・」

俺の説明を聞いてうるたえながらもアルフは答えた。

「二人とも、そろそろ飯を食うとしようや」

アルフと話してる間もずっとほほえましい親子の図が続いてた二人をこちらに呼び戻す。早く食わねばせっかく作ったのに冷めてしまふからな。

「「あ、ごめんなさい」」

同時に謝りながら二人は席に着く。いやはや・・・本当にほほえましい。

そんなことを思いながら、

「じゃあいただきます」

「……いただきます！」

俺たちは食べ始めた。

食事の間中、フェイトはずっと喋り続けていた。あちらの世界のこと、ジュエルシードを集めるときのこと、俺のこと……。今までふれあえなかった分を取り戻すかの勢いでプレシアに話しかける。それをプレシアも本当に楽しそうに笑いながら聞いていた。

プレシアのことで複雑な気持ちになっていたアルフだったが、二人のそんな様子を見ていつの間にか笑みを浮かべていた。

食事が済んだ後、プレシアはあの事を話すことに決めたらしい。強い意志を持った目でこちらを見てきたのでそれに頷いて答える。

「フェイト」

「なに？母さん」

プレシアの隣で笑みを浮かべながら座っていたフェイトはプレシアの顔を見る。

「これから母さんが言うことを聞いてくれる？」

「もちろんだけど……どうしたの？」

「このことを聞いたらあなたは私を怨むかもしれない。憎むかもし

れない……。でも覚えておいて。私はどんなことがあってもあなたの母さんよ」

フェイトはプレシアが何が言いたいのかわかりかねている様子。アルフもいぶかしげな顔をする。俺はアルフに静かにきくようにそつと伝えておく。

そして語りだしたプレシア。フェイトはプレシアの娘であったアリシアのクローンであること。そのアリシアはすでに死んでいること。だからプレシアはプロジェクトフェイトでアリシアを蘇らそうとして……。フェイトを造りだしたこと。原因の大部分である洗脳の部分が抜けているせいで全てがプレシアのやったことのように聞こえた。

そのことを聞くと、

『たとえあの時私が狂気に突き動かされていたとしても、それを私がやったことに変わりはない。だからこれでいいの』

アルフは初めは怒りに燃えそうになっていたが、プレシアの表情と洗脳魔法のことを思い出し、拳を強く握り締めて歯を食いしばっていた。きつと自分の不甲斐なさにはらだっているのだろう。

とりあえず俺はアルフに即席で鎮静効果のある『カームシヨール』を作っかけておく。多少は気持ち落ち着くだろう。

話を聞かされたフェイトは目を閉じて聞いていた。その表情には何も浮かんでいない。プレシアはフェイトを見ながら静かに待っている。

数分後。

「母さん」

「なに？フェイト」

「わたしは・・・今私は母さんにとってどんな存在ですか？」

「フェイト、あなたはね、私にとって・・・最愛の娘よ」

そう言っただけで静かにフェイトを抱きしめる。

「母さん・・・っ！」

フェイトも感極まったように泣きながらプレシアを抱きしめる。アルフはもらい泣きしたのかぼろぼろと涙を流している。それをハンカチで拭き取りながら、俺はこの暖かな家族の様子を静かに見つめていた。

「シヨウゴ・・・私」

「どうした？私人間じゃない宣言する気か？」

「・・・うん、だって私クローンだよ？普通の人じゃない・・・」
俯きながらそう言うフェイト。ふむ・・・、

「ていつ！」

「あうっ！」

「な・・・なにをするの!?!」

俺のデコピンで赤くなったところを抑えながら涙目で上目遣いに睨みつけてくるフェイト。自分では怒ってるつもりなのだろうが、むしろ可愛いだけであることに気づいているのだろうか。

後ろでプレシアが「うつ・・・フェイト、恐ろしいっ!」とか言いながら鼻血を垂らしてそんな気がするが、気のせいということにしておく。

「お前・・・バカか?」

「えっ!?!」

デコピンされた後に急に頭をなでられフェイトは混乱する。

「クローンだからなんだ?別に漫画とかにありがちな寿命が短いとか、人とどこか違う器官とかがあるとかじゃないんだろ?」

「・・・うん」

「ならいいじゃねえか。どんな出自だろうとお前はお前だ。ヒトっていつのは心があればどんな形であろうとヒトだ」

我思う、故に我ありという言葉があるが、人を形作るものは心である、ということを書っている。この言葉を信じるとすれば、フェイトは立派な人間といえよう。

「もし、世界がお前が人間じゃないって言おうとも、アルフやプレシア、俺らはお前を人間だと認めてる。だから自分を卑下するようなことを言っな」

「あ・・・うう・・・」

プレシアに引き続き俺も抱きしめる。フェイトは恥ずかしそうにし

ているがそんなことは気にしない。

ロリコンやら変態やらと思った奴は表でろ。隊長直々の拷問を体験させてやる。

「ま、とりあえずお前は周りの人間にもう少し我がママを言って見る。子供なんだから大人に頼っていいんだからな」

フェイトを放してからもう一回頭を撫でる。すこしそうしていると何かを決心したように顔を上げ、こちらを見る。

「あ、あのシヨウゴ」

「ん？」

俺が答えると少し深呼吸をして、小声で何かをつぶやく。そして、

「わ、私と・・・友達になつてくれませんか？」

その言葉に俺は自分ができる限りの笑みを浮かべながら、

「もちろん！」

そう答えた。

13話 いやはや・・・微笑ましい限りだ（後書き）

何かあったら感想やメッセージへどうぞ

14話 名前を呼んで 前

あれからいくらか談笑した後、時の庭園にて一泊させてもらった。親には別に1日位帰らなくても何も言われることはない。一番ひどかったのは半年どっか行つて帰つたと思つたらまた半年いなくなつて・・・ということをやらかしたときだろう。あの獅子舞隊長問答無用で拉致つて行くからなあ・・・。

まあそんなわけでどうせ友達の家にいるとか何とか考えてもらえると思うので大丈夫なのだ。

毎朝の習慣で地球ではまだ日も昇らぬ時間に起床。建物から外に出てフィフを構える。ほぼ日課となつている早朝練習だ。高町家の人達と手合わせできない分、今日は少し濃いめのメニューにしよう。

Side Fate

それは偶然だった。今日だけは朝早く起きることができて、何となく部屋から出てみると、外に向かうショウゴの姿が見えた。何をするのかな?と思つてついて行くと、急にデバイスを起動して構え、振りだした。片刃の大きな鋏を振るっているのはちよつとシユールな感じがしないでもない。

でも、不思議と変な感じではなかった。なにか、しっくりくる感じがする。

しばらくその状態で振っていたが、一通り終わったのか今度は鍔が二本に分かれた。それを今度は振るっていく。途中でスフィアが何個か現れ、それからシューターがいくつか発射される。それらを両手に持った鍔で斬り捨てていく。初めは目に見える程度の速度だったけど、徐々に速度が上がっていった。手がいくつもあるように見える速度まで上がっていく。何かの演舞のように舞うようにスフィアを斬り捨て、終わった。

「どうしたんだフェイト」
こちらに振り向かず急に私の名前を呼んだショウゴに私は驚き固まった。

S i d e O u t

ばれてないと思っていたのか、名前を呼んだことに驚き固まっているフェイト。
この程度の察知ができなければ俺は今頃死んでたんじゃないか？と思う。

「ほら、そんな寝巻のままで出てくんなんて」
放り投げていたジャージを薄着のフェイトにかけてやる。太陽の光もないこの庭園は少し肌寒い。

「あ、うん」
ジャージをかけるとフェイトは動き出す。フィフを待機状態にして、フェイトと一緒に戻ることにした。

戻ってから風呂を借りる。場所はフェイトに聞いた。

ささっと汗を流して台所へ向かう。そこには寝巻から着替えたフェイトがエプロンを着て待っていた。

「悪い、待たせたか？」

「ううん、大丈夫」

そう言葉を交わしてから朝食を何にするか考える。材料を見て・・・

「パンにハムエッグ、サラダと何か一品付ければ充分か」

ご飯はないようなので洋食風に。一品はフェイトが作るものだ。今の技量でできるものといえば・・・

「卵焼き？」

「そう」

目玉焼きもあるが、まあいいだろ。とりあえずトースターにパンを突っ込んで焼き始め、それと並行して

俺がハムエッグ、フェイトが卵焼きを作り始める。一つ一つわかりやすく教えながら作っていく。

フェイトは容量がいい方なので教えればすぐに理解するので教えがいがある。フェイトが焼き始めるころにはトースターのパンが焼けてるようなので皿に移しておく。

マーガリンを塗っておいておき、次の分を焼く。卵をフライパンに落として少し焼いたら水を入れてふたをする。フェイトの方は少々形が崩れているようだが、一生懸命頑張っていた。

そんな感じでサラダも盛り付け、そこらにあった調味料でドレッシ

ングを作ったところでプレシアやアルフがやってきた。その後ろには新たに猫耳を生やした女性がいた。

女性の方も俺に気付き、こちらへよってくる。

「はじめまして。山代翔吾さんですか？」

「ええ」

「私はプレシアの使い魔のリニスといいます。この度はありがとうございます。プレシアとフェイトを救っていただいて、そう言つてリニスは頭を下げる。」

「ああ・・・いえどうも」

下手に断るのもよくないと思い、軽く返事をする。

というより、リニス生還とは・・・。確かプレシアに捨てられたはずなんだが・・・まあいつか。

とりあえず全員席に着いて食べ始める。

「「「「ご馳走様でした」「」」」」

「はいお粗末さまです」

食べ終わった皿を集めて流しに持っていくが、リニスに「このくらいは私がやりますよ」といって横から奪い去られた。

とりあえず、洗いはリニスに任せてフェイトを呼ぶ。

「どうしたの？ ショウゴ」

「フェイトは白い魔導師のことを覚えてるか？」

「うん、覚えてるけど・・・そう言えばショウゴと知り合いだったね」

「そうだ。それで、アイツがお前と友達になりたいって言ってるんだが・・・会ってやつてもらえるか？」

管理局に会う前にも一度顔合わせしとかなきゃならないし。そのことも伝えると、

「うん、いいよ。私もあの子にはきちんと謝らなきゃいけないし」
きつとジュールシードを集める過程でのことを言っているのだろう。
フェイトは優しい子なのでそう思うのも無理ないだろう。

「ま、そう言うことでもいいか。じゃあ準備したら出られるか？」
今の時刻は地球時間で言うと8時半。少し準備して向こうにつけば、
それなりにいい時間になるだろう。

「うん、わかった」
俺の言葉に返事をした後、自分の部屋へと向かっていった。

「あの子は・・・大丈夫なのかい？」
フェイトが去ると、アルフが話しかけてくる。

「それはどういう意味でだ？」

「ほら・・・フェイトは色々事情が複雑だろ？そういうのを変な目で見てくるとか」

ご主人大好きなアルフとしては友達ができるのは嬉しいことだが、
フェイトに傷ついてもらいたくないのだろう。

「大丈夫だ。あいつはそんなことを気にする奴じゃないよ」

「そっか」

俺が自信強く言うと、それだけを言って俺の隣に座る。俺はなのはの携帯に『フェイトと会うことができる。準備しとけ』とだけメールを入れておく。アンテナもないはずのここから携帯が使えるのはプレシアの超技術みたいなもんだ。ここにまで電波が届くようにしてくれたらしい。

それから30分くらい。俺は家事をしているリニスの後ろ姿をぼつと見たり、隣のアルフとしりとりをしたりして時間を潰していると、居間にフェイトが戻ってくる。

「準備できたよ」

黒いワンピースに身を包んだフェイトがいう。落ち着いたフェイトの雰囲気にはあっている服だろう。

「じゃ、行くか」

そんなフェイトに立ち上がりながらそう言って、俺たちは時の庭園の転送ポートに足を向けた。

14話 名前を呼んで 前（後書き）

なんか書いてるうちにリニスが復活した件。まあいても別に困らんからいいかと思う。

サクサク物語が進んでたのがウソのように亀のような遅さ。一話の文の量を多くするか？それとももっと展開を早くすべきか・・・悩む。

15話 名前を呼んで 後

フェイトの拠点としていたマンションの屋上へ転移し、そのまま翠屋へ向かう。その途中で家に連絡を入れて心配要らないことだけを伝えておく。

初めは今までゆっくり見まわってなかった分、フェイトが周りをきよろきよろ見ながら興味深そうにしていたが、いざ翠屋の前に着いたときにはガチガチに固まっていた。

「大丈夫か？フェイト」

「だ、大丈夫・・・問題ないよ・・・」

「いやいやいやいや。ガタガタ震えてるから！どんだけ怖がつてんだよ！と思いながらアルフの方へ向かい

「おい、アルフ。お前のご主人様が大変な状態だ。どうにかして来い」

「む、無茶言わないでくれよ！私よりアンタの方が適任だろ！」

「ちっ、ならファイフ！お前なら『無茶ぶりにも程があるっ！』とか拙はまだ一度も話した覚えがないんじゃないっじゃが！？」なら自己紹介的感觉で逝って来い！」

金髪の少女はガタガタと震え、その両サイドにいる目を前髪で隠した高校生くらいの男子と大学生位の女性が言い合う姿・・・端から見れば激しくシニールである。

「・・・お兄ちゃん達なにをやってるの？」

そんな光景は翠屋の中から出てきたなのによって終止符がうたれ

た。

翠屋の中の一つのテーブル。そこにはガチガチなのはとフェイト、彼女らを心配そうに見るアルフ、そして、それらを見る俺が座っていた。

それ以外にも、カウンターの士朗さんや、厨房につながるところには恭也さんと美由紀さんが気配を消してこちらをうかがっている。自分の娘・妹が心配なのもわかるけど仕事しようぜ……。

「あ、あの……!」

「な、なにっ!？」

「うう、趣味はっ!？」

「あ、えーと……」

……なにこの会話。お前らはお見合いでもしに来たのか？ 戦闘中にはあんなにスムーズに話していただろうに……いざ向き合ったらこれか……。

はあ、とため息をつく。しゃーない……。

「おい、なのは、フェイト」

「「な、なに!？ ショウゴ（お兄ちゃん）!」
仲いいな、おい。」

「深呼吸しろ。少しは落ち着け」

「「すーはー・・・」」

数回繰り返し返して、済んだのを見てから、

「落ち着いたか？」

「「う、うん」」

「なら本題だ。なのは、お前がフェイトに言いたかったのはどんなことだ？」

「え、えーと、初めはなんでジュエルシードを集めてるの？とか、なんでそんなに悲しそうな目をしているの？とか色々聞きたいことがあったんだけど・・・今一番言いたいのは、友達になりたいの、フェイトちゃん」

なのはの言葉にフェイトはビクツとする。

「わ、私なんかでいいの？」

きつとフェイトは自分がアリシアのクローンであるとか考えてるんだろう。あの時はプレシアやアルフ、俺のようなある程度心を開いていて、相手が本当に自分のことを考えてくれると感じれたからこそ大丈夫だったが、なのはとはまだそこまである程度深い関係を結んではない。拒絶されるかも・・・とか思っているのだろう。だから俺は・・・

「え・・・？」

「大丈夫だ。こいつはお前の生まれとかそんなんは気にするような人間じゃない。それにお前もあんまし自分のことを卑下するなよ？プレシアとかお前を愛してくれている人たちを冒涇しているようなものなんだからな」

フェイトの頭を撫でながら言う。

少しして、フェイトが決意の色を瞳に宿してこちらを見てきたので、俺は外からは世間話をしているように誤認させる結界を張る。完全に外界と切り離す結界と違い、魔力をほとんど使わず、しかも探知されない素敵仕様な結界だ。ちなみに俺のオリジナル。作ったきっかけは・・・全て獅子舞隊長のせいとだけ言っておこう。

そんなことは置いといて、フェイトはなのはに語る。自分がアリシアという娘のクローンであることや、母親に頼まれ、自分も母親に笑ってもらいたいからジュエルシードを集めていたこと、今の家族の状況のこと。

それらをすべて話し終える。フェイトはギュツと目を閉じて、隣の俺の手を強く握る。俺はその握られた手を優しく握り返してやる。アルフも不安そうな目でフェイトとなのはを交互にせわしく見ているので少し落ち着くように言う。

そして少しの間——フェイトにとっては永遠にも感じられる時間の後、なのははフェイトを見て、

「大丈夫。私はフェイトちゃんだからお友達になりたいの。アリシアちゃんのクローンとかそんなことは関係ないよ」

笑みを向けながらフェイトに言った。それを見て、フェイトは固まり、俺の胸にしがみ付いて泣きだした。それをあやすように背中をポンポンと叩く。アルフも感極まったのか俺の肩に頭を当てて泣きだすのでそちらの頭もポンポンと叩く。

その光景をなのはは嬉しそうで、どこかうらやましそうな目で見ていた。

二人とも落ち着いたら俺は結界を解除する。それから二人はぎこちなくだが、楽しそうに会話をする。

そんな二人を横目に見ながら、俺は士朗さん達に心配ないとアイコンタクトで伝える。

俺の言葉にはあゝと安堵のため息をつく高町家一同。唯一厨房に残ってる桃子さんには美由紀さんが伝えに行った。

その後、すぐに桃子さんがやってきた。

「はい、二人とも」

そう言うてなのはとフェイトの前におかれたのは翠屋人気ナンバーワンのお菓子であるシュークリーム。二人はどういうことかわからず、ただ首をかしげている。そんな二人に桃子さんは、

「お友達記念よ。二人で仲良く食べなさいね？」

そうウインクして言い、俺やアルフの前にはショートケーキをおいてくれた。

「ショウゴ君もお姉さんも二人をよろしくね」

そして厨房へと帰って行った。

二人はぼかん、としていたが、やがてえへへ、と笑いあって食べ始めた。二人からは一歩離れるようにしながら俺たちも目の前のショートケーキを食べ始める。

「……！」

食べたフェイトとアルフは目を見開く。桃子さんのお菓子は絶品だ

からそんな反応をするのも仕方ない。いつもの1.5倍の速さで食べる・・・フェイトはこれようやく常人の速さで、アルフの場合は一瞬である。

「いやあゝなのは・・・だっけ？アンタのお母さんのお菓子は美味しいねえ」

美味しい物を食べれば機嫌のよくなるアルフ。単純というか・・・。フェイトもアルフと同じ意見なのかシュークリームを頬張りながらコクコクと頷く。

なのはも自分の母親を誉められてうれしいのか笑みを浮かべている。いやはや見ていて微笑ましい・・・と思いたいが、周りの状況がそうはさせてくれない。美少女、美女三人に男一人・・・周りからの視線がうざい。主に嫉妬とかそんな感情が伝わってくる。

というわけで、それらから逃げるためにも一度席を立つことにする。まず向かうのは高町家の長男長女のところ。

「あんたらいつまでそんなことしてんですか・・・」

「いや・・・なのはがあんなに嬉しそうなのは久しぶりだからな」

「新しいなのはの友達ってお人形さんみたいに可愛いね」
妹の様子に嬉しそうな長男シスコと呑気にそんなことを言ってる長女。

「ま、さつさと仕事に戻ってくださいよ？士朗さん達だけじゃそろそろまずい時間でしょうし」

お昼が近くなり始めたこの時間、だんだんと客足が増えてくるころ

だ。今はまだいいかもしれないが、もうちょっとしたら猫の手も借りたい状況になるだろう。

二人にそう言ってからトイレへと向かう。目的は管理局相手の準備。こちらの身内に手出しはさせない。

その為にも頑張るとしますか。

16話 管理局との会談（前書き）

今回読者の皆様の気分を害すような内容が含まれております。食事
中に読むのは控えた方がいいかと思えます。

16話 管理局との会談

・そろそろ時間だな。そう思ってショウゴはプレシアに連絡をする。その後すぐに魔法陣が現れその上にプレシアとリニスが現れる。フエイトはなのはと遊んで行くそうなので高町家の皆さんとアルフに二人を任せショウゴたちは管理局との会談の場、海鳴臨海公園へ向かう。

その道中。確か劇中では行方不明になっていたリニスがここにいる理由を今さらだがショウゴはプレシアに聞く。

「リニスは今までどうしてたんだ？」

「洗脳されて少しして朦朧とだけ意識が戻った時があったみたいだね。アリシアと同じようにポッドの中に保存してたの。それを思い出して再契約したというわけ」

そのプレシアの答えを聞いて疑問が解決したショウゴは二人とこれからのことを打ち合わせしつつ、昔のフエイトの様子についてプレシアとともにリニスに聞いたりしながら海鳴臨海公園を目指した。

目的地に到着すると魔法陣が現れて、その上に三人の人物が現れる。真中に女狐、左にK Y、右にエイミィ・・・なんたらさんだ。

「アースラ艦長のリンディ・ハラオウンです」

「管理局執務官クロノ・ハラオウンだ」

「執務官補佐のエイミィ・リミエッタです」

「フリーの魔導師、狩野翔吾」

「同じくプレシア・テストロッサよ」

「プレシアの使い魔リニスです」

とりあえずお互い自己紹介をする。正直名前なんざ個々人が識別できればどーでもいいとシヨウゴは思ったが、まさか呼び名にKYやら女狐やらを使うわけにもいかなかったため自己紹介から始めることになった。

互いの自己紹介も終わったところでシヨウゴ達はさっさと本題へ入ることにする。

「昨日、ジュエルシード発掘者のユーノ・スクライア君から大体の事情は聞きました。それで、何故あなたたちはジュエルシードの回収を行っているのですか？」

管理局の代表であるリンディはシヨウゴ達に質問をする。

「俺はこの街の住人ですよ？あんな不発弾みたいなもの放置してたら何が起こるか分からないじゃないですか。現に街の一部分ですが、結構広範囲の場所が被害を受けましたし」

「私も同じ理由ね。隣町に住んでてあんなものがゴロゴロ転がってたら危ないから」

ちなみに、プレシア達テストロッサ家は、フェイトとアルフが使っていたマンションをここでの拠点にするつもりだ。今度の休みにはシヨウゴやなのは達に力を借りて色々引っ越し作業を手伝う予定である。

「しかし、彼の証言によれば彼の現地協力者である少女に攻撃を加

えたとのことですが」

「彼の部族名のスクライアのせいね。正直言って私たちは管理局をまったくと言っていいほど信用していないから」

スクライアは管理局に発掘物を売るといふことの代わりに遺跡調査をしているのだ。それは両者には太いパイプが存在する事を意味する。

「何故だ！！法と正義をつかさどる管理局のどこが！！」

プレシアが言った言葉にむやみやたらと感情的な発言をするクロノ。彼はこの場が交渉の席だとわかつているのだろうか。

まあ、それは置いといて。KYの言葉はナイスだ。シヨウゴはそう思っ
てプレシアに合図を送る。

シヨウゴの合図を受けてプレシアは行動に出る。

「まあこれを見てもらえばわかるわよ。あ、そうそう。あまりに酷い映像だから覚悟しなさいね」

そう言っ
て彼女は空間にモニターを出していくつもの映像や写真を流し始める。そこに映るのは紛争地での様子。それだけならばまだいいが、そこに映っていたのは・・・

「・・・」

「うそだ・・・」

「ひどい・・・」

管理局の制服を着た者たちによる孤児への強姦、魔法の実験台etc・・・

強姦されている少女たちは誰もが操られたような虚ろな目で管理局

員の言いなりになっていたり、実験台となっていてる者たちは生きたまま脳髓をあたりにぶちまけたり、四肢を一本ずつ切り落したり、研究所の中で脳髓だけになっていたりする者たちなど、人の所業とは思えないほどのひどい映像だった。

「うおえええええ・・・」

ある程度映像が続くと基本的に通信士であろうエイミーは胃の中のものを吐き出した。執務官であるKYや艦長という立場の女狐は現場であるような光景を見たことがあるのだろう。多少顔色が悪いようだが、エイミーのように吐いたりはいしない。

プレシアやリニスは一度見せていて、その時は彼女らも吐いた。そして激しく怒った。強姦されている少女らの中にはフェイトと同じ年代の子らもいたのだ。許せるはずもない。

かく言うシヨウゴはこれらの映像を見る程度ではいまさら吐き気などとは感じない。代わりに彼の頭の中にはその時の状況が鮮明に流れる。確かにシヨウゴたちが間にあつて助けられた子らも大勢いた。だが、手遅れになったものはその倍以上はいったのだ。管理局員を殺し、助け出して腕の中におさまった少女らはもはや廃人同然の虚ろな目にやせ細った体。そんな彼女らは最後に揃って笑みを浮かべていつもこう言うのだ。

「助けてくれてありがとう」と。

それを聞いた時のむなしさが胸にこみあげてきて、思わず手を強く握る。握った右の拳からは血が流れるが、まったくと言っていいほど痛みを感じない。代わりに湧いて出てくるのは目の前の管理局員らに対する殺意。八つ当たり以外の何物でもないが、それを抑えることは全くできない。その結果、この場にいる全員が固まった。真正面からその殺意を当てられた管理局の三人。リンディやクロノは冷や汗を流し固まり、エイミーに関しては小動物が本能で身を守る

うとするかのように小さく丸まって歯をがちがちと鳴らす。
余波で当てられたプレシアらはそれを感じてシヨウゴがどれほど怒っているのかを実感した。

『落ち着けシヨウゴ。ここで汝がキレたところで過去は変わらぬ。それよりも今は交渉ごとをどうにかするべきではないか？』

そんな彼を止める一つの声。彼のウェストポーチの中にあるデバイスのフイフである。これまでどこに行くにも一緒だった彼女はもちろん彼とともにその無念を抱えている。だからこそ、彼が今このような状態になった時に止めなければと思う。彼女はデバイスだ。彼女にはマイスターの為というのが至上の思いであり、唯一のものだ。だから彼女はマイスターであるシヨウゴを止める。深い絆を持つ彼女に諭されたからか、シヨウゴはあたりにまき散らしていた殺意をおさめる。

『うむ。それでよい』

シヨウゴの様子にご満悦、といった感じのフイフ。

「すまんフイフ。ありがとう」

そんな彼女にシヨウゴはお礼を言う。

『なに。拙の存在理由はマイスターの為に、じゃからな』

そんなフイフの言葉に笑みを浮かべ、全員のほうを向き、

「済まない。話をつづけてくれ」

シヨウゴの言葉を聞いて映像の最後まで流れたモニターを消す。

「さて、これが私たちの管理局への不信感の理由なわけだけれど・・
・そちらはどう思つかしら？」

いまだ呆然な管理局員らにプレシアは言う。彼らが放心状態なのも

無理はない。今まで信じていた管理局があのようなことをしていたのだ。それも管理外世界であるこの地球で。しかもそのあとには戦場の真つただ中でしか感じることでできない濃密な殺気。これだけのことがあって放心しないものはぶっちゃけてしまえば人間として何かが終わっているとは思えない。

「……だ」

「あ？」

俯いたクロノが何やらぶつぶつと呟いている。それを聞いてシヨウゴはなんだ？とかげんそうな声を上げる。

「こんなものはウソに決まっている。そうだろう。管理局は法の番人であり秩序をつかさどる組織だ。でたらめに決まっているじゃないか」

どこか虚ろな様子で独り言のようにクロノは言う。もはや洗脳といつていいほど管理局を崇拜しているクロノは先ほどの映像は信じられないとでも言いたそうな顔だ。

「……そうね。あれが本物であるという証拠はどこにもありませんもの」

そして、クロノの母親であるリンディもクロノと同じような様子で呟く。

そんな彼らを何事かといった風にみるエイミィ。彼女だけは管理局にしこりのようなものを感じていた。

冷静に考えるといい。組織には何事も黒い面といったものは大なり小なり存在する。

それは賄賂であつたり、資金の横領であつたり、犯罪組織への資金援助など。それらは様々な種類がある。

管理局ではそれらに加え、ある種洗脳のようなものを行っている。管理局は魔導師の人員不足だ。ランクの高いものになるほどそれは顕著になっていく。だからこそ、数少ない魔導師が万が一にでも辞職などをされてしまうと困るのである。だからこそ、小さいころからの教育で洗脳を施していく。

クロノやリンディはまぎれもない高ランク魔導師だ。だからこそ強い洗脳が掛けられていたりする。

それとは逆に、魔導師でない者にはそれほど強い洗脳はかけられない。それは魔道士でない者の人口が多いためだ。それに加えてエイミイの父親はジャーナリストであつた。彼は娘であるエイミイにどう接するか迷つた挙句、唯一娘に教えられる物の中で誇れる技能の端末での情報の集め方について教えていた。それにエイミイはまづた。様々な情報を集め、彼女は幼いころから多面的な意見に接する事が出来た。そして、家族が管理局の崇拝者でなかったことも大きいだろう。だからこそ、彼女には幸か不幸か洗脳がかからなかった。

そんな彼女が管理局の執務管補佐という職に就いたのは幼いころからの知り合いであるクロノと同じ職場ならば他のところで働くよりも気が楽で、加えて高給取りであり彼女の情報収集能力が活きる天職だつたのだ。これは選ばざるを得ないだろう。

そんな事情がある彼女は、そこまで管理局に盲信する二人に恐怖を覚える。そして、その様子をショウゴはじつと見る。

「そう。信じられないのなら交渉は決裂ね。こちらは協力しないし勝手に動かせてもらうわ」

壊れた機械のように呟き続けるクロノとリンディを見てプレシアは

どうしようもないと見切りをつけた。

彼女は踵を返して立ち去る。リニスも同じように続いた。最後に残ったシヨウゴは踵を返す前に三人を見据え、

「貴様らが俺たちに干渉したらその時は命がないと思え」

『エイミィさん。緊急連絡のためにあんたには番号を覚えておく』
そう言うってからプレシアの元へと駆けて行った。

残されたのは壊れた機械のようなリンディとクロノ。そして、シヨウゴの言った番号を脳の中に刻みこみながらこれからどう行動に出るかを考えるエイミィのみであった。

16話 管理局との会談（後書き）

管理局、及びエイミイのオリ設定。管理局に関しては別にこんな感じじゃね？と思いますが、エイミイに関しては作者にもマジで訳がわからない。なんだろう・・・書いてたら勝手にこうなった。

そして当初の予定とはまったく別方向に進んでいる件。

ちなみに、元々考えていた感じとしてはアースラをこちらに加え、三提督などを味方につけて大粛清を行おうかと考えてました。どうしてこうなった・・・。

17話 見え始める黒幕

・管理局との会談から数日。ショウゴ達はいつもと変わらない日常を過ごしていた。一つはジュエルシードを集める理由が消失したため。こちらから探しに行く必要はなく、発動したとしてもすぐに管理局が回収しているためだ。かといって全てがあちらでカバーできるわけではなく、比較的近くで巻き込まれそうになった時には即座に封印して回収し離脱ということを何度か行っていたが。

そして、現在集まったジュエルシードは管理局が6個。ショウゴ達が9個。残るジュエルシードは6個になった。

それをショウゴは知ってどうするべきか悩んだ。彼は原作をノートに覚えている限り書き記している。その中には原作の中で出てきたジュエルシードの発生場所とその形状が書いてある。

そして、今までの感じからすると残ったジュエルシードの在り処は海の中。このまま放置でもいいのだがフェイトの魔力によって強制発動したとはいえ、原作ではあれだけの規模の災害が起きた。もし偶然にどれか一つが発動したとすれば、他のジュエルシードも共鳴して発動しあの竜巻が発生するかもしれない。そして、それが発動した時も近くにいないければ海鳴に甚大な被害が起こるかもしれない。それは避けるべきことだろう。だがしかし・・・。

「どーしたの？ショウゴお兄ちゃん」

悩みまくって深刻そうな顔をしているショウゴなのは後ろから首に手をまわして抱きついた。

彼女はジュエルシードを探すこともなくなり、最近は普通の小学三年生として現在は過ごしている。

ちなみに非日常の象徴であるレイジングハートはいまだに彼女が所

持している。ユーノが何も言わなかったのもあるが、言われたとしてもレイジングハート自身なのはから離れることを拒否しているからだ。

現在彼女は実践ばかりで足りない座学の部分をリニスやプレシアから教わり、フェイトやアルフたちと模擬戦をやったりしている。これについては備えあれば憂いなしというか、まだ夜天の書の問題が残っているのでその時のために自分の身を守るようにするためにシヨウゴがやるように言っておいたのだ。なのは自身空を飛ぶのが好きなので喜んで取り組んでいる。

さて、問題である夜天の書の主である八神はやて。実は彼女とシヨウゴとなのはら三人娘は面識がある。その理由はテンプレすぎるので簡略化して書かせていただく。

学校の宿題を片付けるため図書館へ↓八神はやてとエンカウント↓あまりの生活環境のひどさに絶句↓まあ魔法関係に関わらなければいつか

以上。ちなみに会ったのは中学生のころなので結構前からの知り合いである。最近は忙しくて会いに行ってないのでそろそろ行ったほうがいいかなあとシヨウゴは思っていたりする。

ついではやてやアリサ、すずかにも魔法もばらして夜天の書をどうにかするために動くか。とかぶつとんだことも考えている。まあ今の状況ではやらないほうがいいが。

「なに。ちよつとした考え事だ。なのはは心配しないでいい」
そう言いながらシヨウゴは誤魔化するように笑みを浮かべてなのはの頭をなでる。なのはは誤魔化されていることに気づいているものの、

暖かいこの手を感じたらふにゃ、となつて幸せな気分になつてしまふ。そして、もつとしてほしいと言つかのように頭を手に押し付ける。

それにシヨウゴは苦笑しながらも要望にこたえる。兄妹のような暖かな空気がそこには流れていた。

「むゝ・・・」

だがしかし。それらをむくれた顔で見る少女が一人。フェイトである。二人の様子を見ているとなんとなく胸がむかむかする。この感情がどのようなものかは今まで人と接する機会のなかったフェイトにはわからないが、なんとなく感じていたくないものであるとは彼女でもわかった。

そんなフェイトの様子にシヨウゴは気が付き、こちらへ来るように手でフェイトを呼ぶ。それを見てフェイトは変わらぬ様子でトコトコと近づく。近づいたフェイトをシヨウゴは抱えて、そのまま膝の上に乗せる。

「どうした？フェイト」

シヨウゴはフェイトと向き合うようにのせたため、フェイトの目を見て話しかける。

「・・・なんか二人の様子を見てたらここがムカムカして」

シヨウゴに見つめられて恥ずかしがるように目をそむけながらフェイトは答える。それを聞いて、シヨウゴは兄をとられる妹の気持ちか？とフェイトの気持ちを推測し、先ほどののはにしていたように頭をなでる。すると、気持ちよさそうな顔をしてフェイトはシヨウゴに寄りかかる。その様子を暖かな目で見る。

「フェイトちゃんばっかりじゃなくって・・・」

首に巻きつける腕の力を強くしてなのはショウゴの気を引く。なのはの頬はぶくーと膨れていた。それを見てショウゴは苦笑を浮かべてまた彼女の頭を撫でる。

両親は用事で出かけた狩野宅の居間。そこにはやはりほのぼのとした空気が漂っていた。

・なのはやフェイトが帰った後、悩みに悩んでショウゴはジュエルシードの在り処が海に集まっているのではないかとプレシアに聞いてみた。そして、もしそうだとしたら海鳴に被害が及ぶであろうという推測も付け加えて。

「そうね。管理局も最近は手をこまねいているみたいだし、あなたのその推測は間違いじゃないかもしれないわね」

話を聞いたプレシアもショウゴと同じ意見だと言う。もしそうだとしたら娘たちも危ないかもしれない。それだけは避けねばならない。そう結論付けた二人はどうやって処理するかを話し合いはじめた。

・アースラ艦内の一室にあるエイミィ・リミエッタの私室。真つ暗やみの部屋の中でパソコンのキーボードを叩き、ものすごい勢いで画面がスクロールされていくのを見る部屋の主。

「ここもおかしい・・・」

今までに残っていたページと合わせて表示する。そこにはいくつか

の違和感が感じられる記述がいくつもあった。些細なことだが、いくつものものが重なればそれは大きな疑惑へとつながる。自らの階級で見られる範囲で数々の報告書などを表示し、異常なほどの速度で流し見ていく。おかしいものは自らの端末にコピーして保存。

一段落ついたのか、端末の電源を落としてベッドに倒れこむ。先ほどまで見ていたのは、シヨウゴに連絡して貰った写真の中に映っている管理局員の報告書。それぞれ汚職の証拠なども貰い、それぞれを閲覧したが明らかに改ざんされているものばかりであった。

シヨウゴらが殺した局員たちの殉職理由もそれぞれ、どのものにも管理外世界での事故としか書かれていなかった。やっていた悪行の数々などは一つも記されず。ここまで誰にも気づかれないように調べてきたものの、そろそろ心が限界に近い。今のところ何も言われてはいないが、もしかしたら何かアクションを起こされる可能性も捨てきれない。

彼女にとって、もはや管理局の中は安心できないものとなっている。もう一度彼に会ってみよう。心の内を明かせるのは彼やその仲間の人達くらいだ。

そう思った彼女は端末からシヨウゴへとメールを打ちこみはじめた。

・管理局某所

暗い部屋の中にモニターを見ている男が一人いる。モニターには緑髪の女性、リンディ・ハラオウンが映っている。

「・・・以上がジュエルシードに関しての報告になります」

「そうか。ならばアースラは続けて搜索を続行しろ」

「わかりました」

そう言って通信は終わる。

「ふむ。プレシア・テストロッサの洗脳が解けたか」

男の名はヨキ・ゲインツ。管理局の高官であり、プレシア・テストロッサを嵌めた人物でもある。野心家で、これまでも様々な手を使い今の地位にまで上り詰めた。

報告を聞いて、今まで立てていた計画は使えないことがわかったヨキはこれからどうするか思考を巡らせる。

「これならいけるな」

ククツと小さな笑い声を上げ、ヨキはこれからのことに思いをはせた。

17話 見え始める黒幕（後書き）

トリックスターやデイスガイア2、3、4。その他ゲーム小説など
など・・・誘惑が多すぎるぜ！

18話 ジュエルシード回収

・海鳴臨海公園。そこにはショウゴやなのは、テストロッサ一家の四人、そして、

「こ、こんにちわ！エイミー・リミエッタです！」
アースラ所属のオペレーター、エイミーがいた。

今回ここに集まったのは海中に残っているかもしれないジュエルシードの回収をしようと思ったところにエイミーからのメールがあったことから、ジュエルシードの有無を確認するついでに、ここに集まった。

エイミーはショウゴやプレシア、リニス以外の人とは初対面な上に一応管理局の人間ということで持ち前の明るさは消し飛んでガチガチになっていた。

しかし、初対面の三名はほぼ全員子どもなのはやフェイトにアルフ。そして、ショウゴから事前にこんな人物と話されていたので、

「はじめまして！高町なのはです。よろしく願いますエイミーさん」

「はじめまして、フェイト・テストロッサです・・・」

「フェイトの使い魔、アルフだよ。よろしく」
と若干一人見知りしているものの、いい感じで受け入れられた。

明るく人に接するなのはやサバサバした性格のアルフと話しているうちに、いくらか緊張もほぐれたのか楽しそうに全員が話していた。

その光景を横目に見ながら、ショウゴとリニスは探知魔法を走らせ、プレシアは持ってきた専用機械（ソナーのようなもの）を使って探知をかける。

それから数十分、あらかた調べた結果、残りのジュエルシードが海底に沈んでいることを確認。それをどうやって取りに行くかだが、すでにプレシアとリニスのお陰で細かい場所は特定できているそうだが、それを目標に潜ればいいかだが、潜水用の魔法などはあるそうだが、そんなもの使える奴はいない。正確にはプレシアが使えるが、まだ本調子でない彼女では使うことはできない。

そこで俺の『仕立屋』でどうにかすることにする。

『なりきりの服』

以前クレスと名乗り、KYに不意打ちをかけたあの時に使ったもので、着用者が頭に思い描いた人物になりきるといったものである。

今回思い描くのはとあるゲームの鍵の剣を操る少年。確かステージの一つで人魚になっていたはずなのでそれになりきる。

全員にそのことを伝え、海に飛び込んでからなりきる。上半身は裸で下半身はイルカのような形。多少なれるのに時間はかかったが思い通りに動けるようになったのをプレシア達に伝え案内してもらいながら回収作業に入った。

海底ではあまり海が汚れていないからか遠くまで見通すことができ、きらきらと光るその様子は幻想的な印象を与える。なのはやフェイト達にも見せてやりたい光景である。

そんなことを思いながら一つ二つと順調に回収していき、最後の一個を見つけた時、

『シヨウゴ!』

プレシアから切羽詰まった様子の声で念話が来る。

「どうした?」

『管理局よ』

プレシアが簡潔に発した言葉を聞いて迅速な判断を下す。

「なのはたちを連れて逃げろ。連続転移をつかってきっちりまくのを忘れずにな」

『あなたは?』

「囿になる。出来る限り探索の手を分散させたほうがいいからな」

『ちゃんと戻ってきなさいよ?』

「わかっている。早くいけ」

そう言うとプレシアらがどこかに転移するのを感じ、それとともに

管理局と思われる奴らの転移の反応をキャッチ。大体真上に位置しているだろうか。

「フイフ」

『わかつておる』

名を告げるだけで俺の意図をくんで3rdフォームを展開。両手に銃を二つに分けた形の銃をもつ。

「先手必勝！」

『twin burst』

両手を前に突き出し魔力を集束させる。元々ジュエルシードが散らばっていた海底。そこには多量の魔力が存在していたため自前の魔力をほとんど使わずに済んだ。

そして、限界まで溜めこみ……放った。本来俺が扱える以上の魔力を込めた集束砲。それは極太のビームの形をなし、海上に浮かんでいた管理局員をたやすく呑み込んだ。

唯一無事に済んだKYも満身創痍。こちらを追うこともできないだろう。こちらに向かつて魔力弾が飛んでくるが、人魚となっている俺には当たらない。水の中では魔導師が空を飛ぶ速度と同じくらいかそれ以上の速さで移動できるのだ。

すいすいと泳いであちらさんが飛ばしてくる魔力弾をかわし前方にゲート
転移術式を作成、そしてそのまま飛びこむ。さて、適当なところにおびき寄せるか。

18話 ジュエルシード回収（後書き）

色々悩みまくってこんなに時間が経ってしまいました……。レギオスの設定とかややこしくてどうしようとか三期の部分どうしようとか悩んでたらこんなに間が……。

とりあえず無印だけはさっさと終了させようと思います。その後詳しいことは考えようかと。

さて、次話ですがさっさと終盤に向かわせるか追いかけてきた管理局をフルボッコするか悩んでいます。よければどちらか選んでいただけると助かります。なにもなければさっさと進めますが。

遅筆で駄文ですがどうぞ今後ともよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3591k/>

魔法少女リリカルなのは～哀れな転生者のセカンドライフ～

2011年8月14日11時45分発行